



日本フィルハーモニー交響楽団

「被災地に音楽を」

被災地の移り変わりに心を寄せた
10年300回の活動記録



令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。





日本フィルハーモニー交響楽団

「被災地に音楽を」

被災地の移り変わりに心を寄せた
10年300回の活動記録

東北地方沿岸部に甚大な被害をもたらした東日本大震災から、10年の歳月が経過しました。日本フィルが東北3県の被災地に音楽を届ける「被災地に音楽を」の活動は300回を数えました。この活動にご支援とご協力を頂いている皆様に、心より御礼申し上げます。この大きな節目に、活動の記録をまとめるとともに、私たちが見聞きした被災地の折々の状況についても多くの方にお伝えしたいとの思いから、本冊子を作成しました。10年間で4つの期間に分けて、その時期の被災地の様子と日本フィルの活動を、「被災地に音楽を」のレポートから抜粋しました。また、新たに関係者のインタビューを行いました。

震災から10年の間に、大きな悲しみと落胆の中から人々は少しずつ歩みを始め、生活も日常に戻りつつあるように見えます。政府の復興計画も最終段階に近づいています。しかしながら、震災後に急速に進む沿岸部の人口減少、少子化と高齢化は深刻度を増しており、生活の変化によるコミュニティ機能の不活性化、子どもたちへの影響、そして原発事故の問題は残っています。こうした複雑な問題を抱える東北のために、私たち音楽団体にできることは何なのでしょう。それが、私たちが抱き続ける大きな問いです。これまでの活動を振り返ることで、少しでも未来への手がかりが見つけられればと思います。

はじめに	1
目次	2～3
[1] 2011年～2013年	
人々の声に、耳を傾ける	
第1期	5
被災地の様子と日本フィルの取り組み	6～8
インタビュー①	
日本フィルハーモニー交響楽団 元ヴァイオリン奏者 松本 克巳	9
「あまりにも苛烈な被災地の現実を目の当たりにしたとき、 音楽が心の扉を開くカギになると感じた」	
インタビュー②	
日本フィルハーモニー交響楽団 ヴァイオリン奏者 豊田 早織	10
「現地の方々との協働に支えられた活動を通じて、 聴く方のために音楽を奏でることを学んだ」	
インタビュー③	
福島放送 元開発事業部長 河村光伸	11
「どうしたら被災者に伝わるか、自問自答していた日本フィル 未来志向に、文化的格差をなくす活動を続けてほしい」	
[2] 2014年～2016年	
コミュニティの変化と向き合う	
第2期	13
被災地の様子と日本フィルの取り組み	14
インタビュー④	
日本フィルハーモニー交響楽団 ヴァイオリン奏者 田村 昭博	16
「その人の気持ちにどうやったら響くか一層考えるようになった 被災地での経験を、橋渡しの世代として後輩に繋いでいきたい」	
インタビュー⑤	
社会福祉法人こ～ぶ福祉会 こ～ぶのお家いしのまき 元施設長 横前 誠	17
「仮設住宅の方々のためにサロン活動を定期的に開催 音楽にできることがあると思っている」	
インタビュー⑥	
日本フィルハーモニー交響楽団 元事務所職員 富樫 尚代 トロンボーン奏者 伊波 睦	18
「被災地活動の葛藤と経験が、最大の収穫 風のような音楽を社会の共有財産にしたい」	
インタビュー⑦	
女子美術大学名誉教授 ヤマザキミノリ	20
「アートとレジリエンス」	
インタビュー⑧	
南相馬市立原町第一中学校 元吹奏楽部顧問 阿部 和代	21
「音楽に励まされ、救われた10年間に感謝しています」	
レポート①	
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 研究員 落合 千華	22
「『当たり前』に続いていく、原町一中の吹奏楽」	

[3] 2017年～2019年

子どもたちの笑顔と夢のために

第3期	19
被災地の様子と日本フィルの取り組み	20

インタビュー⑧

一般社団法人石巻・川の上プロジェクト理事・運営委員長／杏林大学総合政策学部准教授 三浦 秀之	22
--	----

「コミュニティ作りのための『百俵館』に日本フィルを迎えられた感動
日本フィルと地域住民が一緒になって作っていききたい」

レポート②

東北「夢」プロジェクト2019

「小さな力がつながって、継続した活動になることの大切さ」

一般社団法人ことものための音環境デザイン 代表理事

横浜国立大学 客員教授／元岩手大学 客員教授／

昭和音楽大学 非常勤講師／博士(芸術工学) 船場 ひさお	24
------------------------------	----

インタビュー⑨

岩手県立宮古高等学校 吹奏楽部顧問 佐藤 允治	26
-------------------------	----

「不安の中、子どもたちのために『東北の夢』出演を決断
誰かのために生きることの大切さを教えたい」

インタビュー⑩

赤澤芸能保存会 会長／大船渡市郷土芸能協会 会長 平山 徹	27
-------------------------------	----

「『踊り繋ぐことこそ伝承活動』末代までの伝承を願う
日本フィルから全体で一つになることを再発見した」

[4] 2020年以降

コロナ禍でも音楽でつながった

第4期	29
-----	----

レポート③

日本フィルハーモニー交響楽団×宮古高校吹奏楽部 スペシャル座談会	30
----------------------------------	----

「音楽家と高校生が本気で語りあう、音楽と社会のこれから」 八木まどか

レポート④

1日だけの「夏休みコンサート2020」feat.東北の夢プロジェクト	32
------------------------------------	----

レポート⑤

「被災地に音楽を」300回

オーケストラと高校生の対話イベント「今こそ音楽の話をしよう」	33
--------------------------------	----

インタビュー⑪

日本フィルハーモニー交響楽団 クラリネット奏者 伊藤 寛隆	36
-------------------------------	----

「大変な中で日本フィルを受け入れてくれた方々に感謝
被災地で演奏すると勇気や力をもらう」

インタビュー⑫

日本フィルハーモニー交響楽団 常務理事 後藤 朋俊	37
---------------------------	----

「音楽の無力さを感じ、音楽に出来ることを探りに
被災地のことを広く伝え、受け取ったものへの恩返しをしたい」

「被災地に音楽を」訪問地	38
--------------	----

「被災地に音楽を」実施一覧	39～43
---------------	-------

あとがき	44
------	----



2013年3月、石巻市門脇地区

[1]

2011年～2013年

人々の声に、耳を傾ける

未曾有の被害となった2011年3月11日の東日本大震災発生直後の4月6日。福島県二本松市の避難所に香港公演の際に託された乾電池を届けるため訪問した楽員が「聴きたい方がいれば」と避難所の軒先で行ったささやかな演奏会が「被災地に音楽を」の始まりでした。その後、各地からの要望に応じて被災地を訪問、各地で目にする震災の傷痕はあまりに大きく、自分たちの無力さを思い知らされる日々となりました。被災地で私たちにできるのは誠心誠意、音楽を捧げ、目の前の方々の声に耳を傾けることだけでした。

しかしながら、私たちは多くの被災した方々が音楽に涙を流し、震災後の極度の緊張から解放される場面に立ち会うことで、音楽が人々の心の扉を開ける「鍵」になるのかもしれないと感じ始めました。そして求められる限り、どこにでも行こうという強い思いが芽生えました。私たちは「被災地のことを忘れない」「被災地の状況を伝える」「音楽団体に何ができるかを自らに問いかける」の三つを心に決め、少しずつ被災地訪問を積み重ねていきました。



東日本大震災発生当日の日本フィル定期演奏会会場客席(2011年3月、港区)



第1回避難所での演奏(2011年4月、二本松市)

被災地の様子と日本フィルの取り組み

「被災地に音楽を」レポートより抜粋

◇被災地の様子

2011年

岩手県

6月 釜石市

甲子中学校の体育館が自衛隊の移住基地となっており迷彩色の車やテントなどで埋め尽くされていた。体育館には50人ほどの方が生活していた。

11月 陸前高田市

第一中学校の校庭は仮設住宅の集合帯。アーティストやジャズバンドなどの演奏が行われた体育館は今では、この街の唯一の娯楽施設となっている。

宮城県

7月 南三陸町

震災当初から避難所となった志津川中学・志津川高校の体育館には冷房がなく、蒸し風呂状態。

8月 気仙沼市

小泉中学校、階上小学校校庭には93戸の仮設住宅が立ち並び、空き教室に数組の家族が同居し、食事は届けられたお弁当の生活が続いている。市街地は、いまだ海水の引かない住宅地、街の中に巨大な船体が乗り上げており、津波の被害の甚大さを物語っている。

10月 石巻市

高台の北上中学校から見下ろすと、津波で建物が流され住宅の基礎さえ無くなってしまっており、1軒残った家も1階の壁が突き抜けている。石巻専修大学周辺には沿岸部から運ばれた大量の被災物や、被災した車の集積場があった。

福島県

5月 会津若松市

大熊町全人口11400人の内、3600人が会津若松市内に避難した。避難先は東山温泉を中心に、喜多方や裏磐梯など計63施設にも分かれている。

6月 三春町

富岡町、葛尾村の皆さんが避難されている。三春小学校には富岡第一小学校から8人、第二小学校から6人、葛尾村の小学校から1人の児童が編入した。

6月 二本松市

浪江町、富岡町、飯館村から避難されたおよそ140人が滞在。あだたら体育館には浪江町から避難された方が当初は200人以上、何もない体育館に畳を持ち込み、段ボールで仕切りを作っただけの空間に皆さんが住んでいた。

6月 南相馬市

市の南側の一部区域は現在原発被害による立ち入り禁止区域となっており、市内の海岸から3～4km地域には、いまだにひしゃげた自動車や船底を上にした漁船が、あちらこちらに多数放置されたままになっている。

埼玉県

5月 加須市

福島第一原発の5、6号機の立地する双葉町（総人口約6800人）から約1200人の皆さんが廃校予定だった旧騎西高校に避難されている。双葉町から63人の生徒が編入している。

◇日本フィルの取り組み

7月 南三陸町

避難所となった志津川中学校、志津川高校で仙台フィルの助演を得て、生徒と合同演奏を行った。



10月 石巻市

あとえDaDaにて、女子美術大学学生による絵を飾り、弦楽四重奏のコンサートを行った。



海外からの応援メッセージ(2011年6月、二本松市)

◇被災地の様子

2012年

岩手県

1月 久慈市

道路標識や、ガードレールが津波の力でぐにやりと曲がっていた。いぐらの製造工場が、使う半分だけ取り急ぎ建て直され、半分は鉄骨がむき出しになっていた。

宮城県

5月 南三陸町

避難所が閉鎖となった半年後に共同食堂「さんさカフェ」がオープン。高台にある志津川中学校校庭からの風景は、昨年から変わっていない。登米市の仮設住宅に350世帯、1000人以上の方々が移り住んでいる。

福島県

3月 南相馬市

避難に伴う転校により吹奏楽部員の減少に悩まされており、中には合奏もままならないという状況の学校も。原町第一中学校は、部員は50人から29人に減ったものの、2011年は日本管楽合奏コンテストA部門で文部科学大臣賞・最優秀グランプリ賞を受賞した。

9月 福島市

飯舘村の方々が避難されている松川工業団地仮設住宅は高齢者が多く、多くの方が家族と離ればなれに暮らしている。仮設住宅の一部屋で休憩。狭苦しく、薄い壁、床からは風が吹き抜ける。

10月 南相馬市

鹿島小学校は3つの学校と合同授業をしている。1年半が経ち、生徒も先生も複雑で重たい問題に直面している。被災地におけるさまざまな問題は、次第に質を変え、いまだに多くの人々の心を苦しめ、落ち込ませていると感じる。

12月 いわき市

仮設住宅や借り上げ住宅から学校へ通ったり、生徒同士で下宿していたりと、様々な生活環境の中にいる。いずれも、家族はバラバラな状態のようだ。

埼玉県

3月 加須市

双葉町の役所機能は現在でも旧騎西高校(避難所併設)に移転されたままになっている。福島県外に避難する町民のうち、約1200人が埼玉県内に住んでいる。

山形県

6月 米沢市

福島市、伊達市などから、親が福島県内の職場に通勤できる範囲で遠くに住みたいという約3700人の方々が避難されている。その内およそ半数が未成年のいる家庭で、未就学児童だけで約700人にのぼるといふ。

東京都

9月 江東区

現在東京には3県から9000人が避難されている。

◇日本フィルの取り組み

1月 久慈市

2009年に『ゼロ弾きのゴージュ』を公演したアンバーホールで、教育委員会、ホール、日本フィルが一体となって動物の謝肉祭コンサートを開催した。



3月 三春町

マイケル・スペンサーによるワークショップを東北で初めて開催。自分たちの「春」を作曲してもらい、ヴィヴァルディの《春》を体験した。

3月 東京都杉並区

南相馬市と災害的相互援助協定を結ぶ杉並区の、杉並公会堂で南相馬の子どもたちと歌で共演した。

8月 石巻市

女子美術大学の学生さんとともに楽器作りのワークショップを行った。



9月 東京都江東区

3県から避難されている1300人が暮らす国家公務員東雲住宅に近いカトリック潮見教会で金管五重奏のコンサートを行った。



被災地の様子と日本フィルの取り組み

「被災地に音楽を」レポートより抜粋

◇被災地の様子

2013年

岩手県

5月 野田村

交通機関も絶たれ陸路に頼っていたため復興が遅れている印象を受けた。5分の1の子どもたちが仮設住宅から通っている。子どもたちのストレスが心配だと感じた。

6月 大船渡市

震災から2年3ヶ月が経ち、仮設での生活も近隣住民同士の生活音によるストレスがあらわれてきている。

11月 陸前高田市

中学校では先生が子どもたちの状況を「怒りの3年目」と表現した。震災当時小学生だった子どもたちは目の前で津波を見た経験を持ち、多くの子どもが家族を失い、8割近くが仮設住宅から学校に通っていた。親のストレスが子どもに伝わり、多くの子がPTSDの兆候を抱えているとの話を聞いた。

宮城県

3月 南三陸町

被災の現場をみてまわった際のタクシー運転手さんは「志津川病院に入院中の義母はベッドごと流された」と話していた。

6月 石巻市

海岸に近い地域は地盤沈下が激しく、道路もかさ上げされていた。居住不適指定地域には取り壊しを待つ建物も多く、町の中心はまだ復興に程遠い。

福島県

4月 南相馬市

除染と原発にかかわる作業員が増え、ホテルや道路も混んでいた。復興に向けて活気があるような印象を受けるが、大きな袋に詰められた除染した土があちこちの集落の一部分に集められ、放射能汚染の本格的な解決にはどれほどの歳月がかかるのか、想像を絶する困難さを感じる。人口は増加しているが、子どもの帰還は少ないようだ。

10月 南相馬市

原町第一中吹奏楽部員は4月の時の34人から45人に増えていた。南相馬は福島第一原発から20km圏内の帰宅困難地域の小高地区、30kmまでの緊急時避難準備区域の原町地区、放射能の影響がないと言われている鹿島地区の3つに分断。鹿島中学校は小高地区の3つの小学校が合同で仮設の校舎に入っている。全員が借り上げ住宅か仮設住宅から通っている。被災から2年半を過ぎた親のストレスが子どもに伝わってきているという校長先生の話もあった。

◇日本フィルの取り組み

3月

被災地の統廃合される学校の校歌を日本オーケストラ連盟がCD化する事業を立ち上げた。

4月 南相馬市

南相馬市の原町第二中学校への楽器指導で「被災地に音楽を」が100回を超えた。



6月 石巻市

復興祈念事業カンタータ「大いなる故郷石巻」に日本フィルから15人が友情出演。オーケストラは石巻市民交響楽団、合唱、舞踏で総勢380人の被災者が、1500人の市民に披露した。



あまりにも苛烈な被災地の現実 音楽が心の扉を開くカギになるかもしれないと感じた

日本フィルハーモニー交響楽団
元ヴァイオリン奏者
松本 克巳



「支援したい」 全国の人々の気持ちを 背負って被災地へ

日本フィルは以前、毎年日本全国隅々まで出向いて演奏会を行っていました。それによって日本フィルが「どこにでも音楽を届けてくれるオーケストラ」と人々に認識されていて、被災地に足を踏み入れた時に受け入れてくれたのはそのおかげだと思います。被災地に伺うときは音楽家が演奏会に行くような気持ちとはまるで違うもので、何かしたいけれどもできる支援が限られていて、自らの思いや、集めたお金・支援物資を日本フィルに託したい、という方々の思いを背負っていると強く感じていました。

震災直後の被災地 目にしたもの

2011年4月6日、福島県二本松市が最初の訪問地でした。香港の会社が被災地に支援物資として乾電池を届けたいということで、許可が下りれば演奏したいと考えていました。避難所の中はとても入れる雰囲気ではなく、たまたま天気良かったので、体育館の玄関先で30分くらい演奏しましたが、聴いた人が涙を流し、「こんなところでこんな音を聴けるなんて」という声が一番嬉しかったです。その後、5月8日から3日間かけて、宮城県の名取市、気仙沼市、石巻市を回りましたが、本来ある道が全くなく、

あるはずのものが何にもない状態で、鍋、スピーカー、テレビ、三輪車が半分埋もれたような状態で転がっていて、思わず胸が苦しくなりました。手付かずの現場にショックを受けました。

音楽が心を開く カギになった

名取市の避難所に行った時、演奏中にもものすごい雷雨がありました。が、聴いていたお母さんが「この雷と雨は、亡くなった方々の喜びの涙だ」と言ってくれたことが印象に残っています。そのお母さんの息子さんは避難所で亡くなったそうです。しかし、その場を全部取り仕切って笑顔を絶やさず振る舞っていました。彼女が悲しみではなく感激の涙だと表現し、こんなにすごい感動をありがとうと言ってくれたことは、本当に励みになりました。

他にも、悲しくても、2カ月も涙を

流したことがないという人がたくさんいらっしゃいました。みんな色々な悲しみを持っていて、耐えている。それが、音が聴こえたことによって心が開かれて、涙がとめどなく出る。「2カ月分の涙を流して良かった」「すごく気持ちが軽くなった」「生きていてよかったんだ」「お父さん、私もう少しこっちで頑張るわ」とたくさんの人から前向きな言葉を聞いて、それが音楽の力なのかなと思いました。

音楽とは、頑なに閉じ込めていた感情がふと外に出ていって、抱えていなくてもいいんだというように感じてもらえる、心を開く鍵のようなものかなと思います。現地に行って、ただ弾くだけではなく現地の状況や人々の気持ちに触れることによって、自分たちが音楽で何かを伝えるにはどうしたらよいか、それを思うことで、音楽家としての姿勢そのものが変わったように思います。



避難所での演奏(2011年5月、気仙沼市)

現地の方々との協働に支えられた活動を通じて、 聴く方のために音楽を奏でることを学んだ

日本フィルハーモニー交響楽団
ヴァイオリン奏者
豊田 早織



阪神淡路大震災で感じた もどかしさ

私は子どもの頃、神戸に住んでいました。阪神淡路大震災が起きた時はすごくショックを受けたのですが、当時は大学を出たばかりで何もできなかったんです。その後、96年に日本フィルに入団した時、日本フィルが震災後の神戸を訪れ演奏していたことを知り、元住民としては感謝の念と、そんな活動をする楽団に入れたことを嬉しく思いました。そして東日本大震災が起こった時、今回こそ支援に行きたいと思いました。会津若松行きが決まり、音楽を通して被災地支援ができる喜びと、まだ直後なのでどうなるだろうかと不安もあとから湧いてきましたが、行きたい気持ちの方が強かったです。

現地の方と 一緒に作る演奏会

2011年5月4日、福島県会津若松市の文化センターへ、弦楽四重奏で訪問

しました。そこは大熊町から避難した方々がいる地域でしたが、ちょうどゴールデンウィークだったので、お花見に来た人など福島県内を中心に様々な場所から来た人が聴いてくれました。東京から来た自分たちだけでなく、県内でも大きな温度差があることにショックを受けました。続けて5月6日には、福島県の大塚町から避難した子どもたちがいる埼玉県加須市の小学校を訪れました。子どもたちに楽しんでもらえるプログラムを考え、何とか演奏をやり切りました。

私たちは訪問して演奏することしかできませんが、演奏会を成功させるためには現地の方と共同体を組むことが大事だと感じています。初めて会う方と演奏会という目的を通じて親しくなり、一緒に試行錯誤しながら演奏会を作ることができるのは、日本フィルならではの強さだと思います。例えば、2017年から三春町や富岡町の小学校で音楽鑑賞教室をやらせていただいています。先生たちの連携の強さを感じます。子どもたちの

特徴や変化を私たちにも教えてくれますし、現地のコーディネーター役の方は子どもたちのことは全て把握されているので、その時の子どもたちの状態に合うことは何かなと相談して下さいます。こういったプロセスがあるのでより良い演奏会になりますし、何より現地の方の熱意に非常に支えられました。

被災地に限らずどこに行っても、子どもが元気になると先生も親も元気になるんです。子どもは素直に喜んでくれるんですけど、大人も知らないうちに子どもに戻って、素になってくれる。音楽を聴いている時間で無意識に心がほぐれるというのがいいなと思います。

被災地訪問を通して 音楽家としての考えが 変わった

音楽は聴いてもらう人のためにあるのですが、自分の若い頃を振り返ると自分のために弾いていたなと思うことがありますね。被災地訪問を通して、音楽と一緒に楽しめることが楽しい、みんなに楽しんでもらいたいという気持ちが強くなりました。

きっと、東北の方たちとの関係はこれからもどんどん続いていくし、これからもいろんな出会いがあるでしょう。被災地の活動をすることで私たちが助けられています。「福島では10年前にあったことが続いてはいますが、東京もコロナ禍で大変でしょ」と言ってくれる方もいて。関係性は終わらないですね。より深まっていくんじゃないかなと思います。



こ〜ぶのお家いしのまきで、はじめての楽器体験(2014年4月、石巻市)

どうしたら被災者に伝わるか、自問自答していた日本フィル 未来志向に、文化的格差をなくす活動を続けてほしい

福島放送 元開発事業部長

河村 光伸



文化センターロビーでの演奏(2011年5月、会津若松市)

最大の被害者、 住む家を追われた 福島の人びと

福島では福島第一原子力発電所の事故によって避難をされた方が一番の被害者ではないでしょうか。何の問題もなく生活していたのに、ある日突然、避難を余儀なくされた住民の皆さんのやるせなさや悔しさは、言葉になりません。町や村をあげて避難するので、その土地には全く人がいない状況になります。伝統芸能はお年を召した方の力が非常に大切なので、そういう方々もばら



大熊町役場の方からお礼の言葉と住民の避難の現状を聞く演奏メンバー

ばらになってしまい、地域のお祭りや伝統芸能がなくならないか非常に心配です。震災から10年一区切りで、こうした問題の風化も困ると思っています。

会津若松を訪れた 日本フィルの葛藤

私が以前より繋がっていた大熊町の皆さんも避難にあたって何ヵ所も転々とした末に、会津若松市に落ち着かれました。日本フィルが弦楽四重奏で会津若松市に来られたのは大熊町の皆さんが移ってきて数週間後でした。少し落ち着いてきて、疲労が出てくる時期でした。皆さん仕事がない、どうやったら復興するかなど、精神的にも肉体的にも追い詰められていましたから、心の底から音楽を楽しめるというゆとりは、当時はなかったと思います。日本フィルのメンバーも、普通のコンサートとは空気感が違い、自分たちの

演奏がいい演奏なのか、悪い演奏なのかということ以前に、この演奏が目の前の方に届くのかと、自問自答しながら演奏しているように感じられたのです。ですが、最終的に心に届かないはずがありません。どれだけ避難された方の励みになったことかと思います。

未来志向に、 文化的格差をなくしたい

東京では毎日どこかのホールでコンサートが行われていて、好きなものを好きな時にチョイスすることができます。ところが地方にいとそれができません。これは格差以外の何物でもありません。東京ではできて、地方ではできないことを、誰が子どもに対して、年配の方に対してやってあげられるのか。地方では音楽ホールについても地方自治体が担っていることが多いのですが、どういうことをやったら子どもや年配の方にケアができるかというようなことは分かっていないことが多いと思います。日本フィルがそれを手伝ってくれるのは大変素晴らしいことです。大切なのはこれから地域を発展させるにはどうしたらよいかという未来志向の考え方です。日本フィルは、見栄をはずらずに一番大事な、地道な音楽活動をやってくれていると思っています。震災直後、大熊町から会津若松へ移られた方々の前で、今音楽をやっているのだろうかという自問自答していた日本フィルでしたが、今後も一所懸命色々な人たちに素晴らしい音楽を届けてほしいと思っています。



鵜住居小学校、釜石東中学校の児童・生徒による「ビリーブ」の合唱(2014年7月、釜石市)

[2]

2014年～2016年

コミュニティの変化と 向き合う

震災から3年が経過した2014年。この時期に、多くの被災地支援団体が撤退をしていきました。しかし、被災地の様子は日常からはまだまだ遠く、ようやく被災者のための公営住宅が建ち始めたにすぎません。被災地での生活が仮設住宅から災害公営住宅に移り始め、それまでに築かれたコミュニティ、住民同士の関係性が崩れてしまっているという課題も明らかになりました。また、各地で子どもたちの震災後のPTSD(心的外傷後ストレス障害)問題が徐々に露わになっていきます。私たちはこの時期に、活動の重点を少しずつ「心の復興」「コミュニティの復興」へとシフトしていきました。

地域が一体感を持って特別な時間を共有することのできるコンサートが、コミュニティ作りのきっかけとなるように現地の協力を求めました。そしてヴァイオリン体験など、より能動的に参加できるプログラムを実施、演奏後に被災者との懇談会を行うなど、積極的に被災者と交流を行いました。また、子どもたちの自発性や積極性、コミュニケーション力を高めるため、独自のワークショッププログラムを実施しました。そして依然として帰宅困難地域となっていた福島県南相馬市小高地区でコンサートを行い、住民たちの再会と交流の機会を作りました。



萩窪音楽祭「みらい夢コンサート」に原町第一中学校を招へい(2014年11月、杉並区)



原町第一中学校にて、マイケル・スペンサーによるワークショップをはじめて実施(2016年5月、南相馬市)

被災地の様子と日本フィルの取り組み

「被災地に音楽を」レポートより抜粋

◇被災地の様子

2014年

岩手県

大船渡市

まだ手付かずの建物が多数あった。

釜石市

最盛期の半分まで人口が減少。仮設の校舎での授業。週に一度しか音楽の先生が来ない、部活もままならない。仮設住宅と復興住宅が併存している複雑な状況。古い商店が再開できない中で大型スーパーが開店した。働き盛りの若い人は街には残っていない。

2015年

岩手県

大船渡市

周辺よりは復興が早く進んでいるものの、海岸沿いやホテル周辺は見渡す限りの更地。工事車両が行き交っている。

山田町

小さな街は丸ごと工事中。沿岸はかさ上げ工事、高台は住宅地の造成工事が進む。復興住宅ができつつあるが、家賃のいらぬ仮設住宅に残りたい高齢者も多い。

宮古市

護岸工事が進み、美しいリアス式の海岸線は高い防波堤と工事の柵で覆われていた。被害が甚大だった田老地区には今も多くの方々が仮設住宅に暮らしている。海岸近くの高台には復興公営住宅の建設が少しずつ進んでいる。人手と物資の不足。

福島県

南相馬市

小高地区は避難指示解除準備地域。奥州相馬氏の菩提寺である同慶寺の住職はこう語る。「4年5カ月が経ったが現在は極限状態。原発からの避難は長期になるほど問題が複雑になり、中でも心の問題や人権問題は目に見えない。私たちは一時は途方にくれましたが、現実を受け入れ、自分の限界を超えて歩み始めている。被災者であると同時に支援者となり新たな役割に目覚めようとしている。和合と融合の中に人類が進化する時だ」

南相馬市立原町第一中学校

震災から4年、子どもたちの数が激減し、部活の存続に苦悩する。

◇日本フィルの取り組み

4月

宮城県石巻市女川町の仮設住宅で初めて「ヴァイオリン体験」を実施。その後、岩手県山田町、宮古市でも実施した。

11月

福島県南相馬市原町第一中学校吹奏楽部を荻窪音楽祭が初めて招聘し、「みらい夢チャリティーコンサート」で日本フィルのメンバーとも共演した。

*荻窪音楽祭は杉並公会堂をはじめ荻窪周辺地域で毎年行われているボランティア主催によるクラシックの音楽祭で、日本フィルも共催団体として企画・制作協力・出演している。

9月

福島県南相馬市、原発から20km圏内の避難指示区域で初めてのコンサートを小高地区の同慶寺で開催した。

南相馬市主催の「響きあうプラス&コーラスコンサート」(会場:ゆめはっと)にゲスト出演。子どもたちへの事前指導を行い、共演した。

11月

「動物の謝肉祭」で大船渡市、南相馬市を訪問する。

*「動物の謝肉祭」はサン=サーンス作曲の小編成の管弦楽作品。日本フィルではスライド・語り付きの上演で子ども向けのプログラムとして好評を博している。



小高地区同慶寺でのコンサート

◇被災地の様子

2016年

岩手県

久慈市

台風により大きな被害。市内の中心部では川の氾濫によって浸水。3.11を超える被害となった。

宮城県

石巻市

震災直後に比べ、物質的には豊かになってきたが、復旧工事は遅れていて、今後への不安を皆、抱えている。仮設住宅を出る人が増えることで、コミュニティが解体してしまっている。

福島県

南相馬市

長閑な山々の風景を背に、飛び込んでくるのはダンプカー、「除染作業中」の立て看板、そして更地に積まれた放射性廃棄物の黒いビニールバッグ。最終処分地はまだ決まっていない。

南相馬市立原町第一中学校

子どもたちが受け身で、覇気がないとの声を聞いた。



南三陸町防災庁舎前で手を合わせる楽員。
町内へ防災無線を放送し続けた職員の方を含め、避難していた多くの方が命を落とした。

◇日本フィルの取り組み

4月

南相馬市立原町第一中学校でレクチャー付きコンサートを開催(CI伊藤による感謝と尊敬のお話)。

※36ページ インタビュー参照



5月

子どもたちの自主性を養い、自発的なコミュニケーションを促すために、マイケル・スペンサーによる音楽ワークショップを南相馬市立原町第一中学校と実施。

*音楽ワークショップでは、参加者が与えられた音楽的な材料を使って自由に創作を行うことで、音楽の深い理解を進めるとともに参加者同士の協働的・集団的な学びの場を作る。日本フィルのメンバーはファシリテーターとしての訓練を受けており、参加者の創作をサポートする。

6月

震災で大きな被害を受けた久慈市の「もぐらんぴあ水族館」の再開を祝うコンサートを開催した。

8月

宮城県山元町を初めて訪問し、金管五重奏のコンサートとクリニックを実施した。

11月

200回目の事業を石巻市雄勝地区のオーリンクハウスで実施。

「こわばっていた心を柔らかくほぐし、気持ちを上向きにする力。同じ場を共有した人同士に不思議な連帯感を芽生えさせ、隣の人を愛おしく思わせてしまう力。音楽の持つそうした力は、新たな局面を迎えた今の被災地にこそ必要とされているのかもしれない」

(同行取材を行った飛田恵美子氏のレポートより)

その人の気持ちにどうやったら響くか一層考えるようになった 被災地での経験を、橋渡しの世代として後輩に繋いでいきたい

日本フィルハーモニー交響楽団

ヴァイオリン奏者

田村 昭博



葛藤の中での石巻訪問と 気持ちの変化

2013年3月、弦楽四重奏で宮城県石巻市を訪れました。正直に言うと僕の中で、演奏家が被災地に行っているのかどうかという葛藤みたいなものがありました。声をかけてもらい、きっかけがなかったら被災地に足を踏み入れてなかったかもしれません。

最初に訪れた石巻市役所の市民サロンには、150人くらいの方がいらして、熱烈な拍手を受けたのを覚えています。演奏前は、皆さん緊張されていた印象でしたが、演奏が進むとだんだん一体感が出てきて、最後には「ブラボー」などの声があったり、感情が溢れ出て涙している方もいました。演奏後に挨拶に来てくれた方が「こんな素晴らしい演奏を聴けるとは思わなかった」と言ってくださったのをよく覚えています。僕も「来てよかった」と思いました。

仮設住宅でも演奏しましたが、そこではお客さん同士が気を遣っているのを感じました。その仮設住宅をお世話している方から、元々違うところで暮らしていた人たちが集まってくるし、みんななるべく早く仮設住宅を出がっているの、ぴりぴりしていると伺いました。しかし、演奏後みんな拍手をして笑顔になり「今日の演奏はよかったですね」とお客さん同士で会話している様子が見え、この演奏会によって一つコミュニティが生まれたと言っていただけでした。

被災地の状況に衝撃。 そして震災を伝えていく 時代へ

タクシーでの移動中は、運転手の方が色々な場所を案内してくださいました。日和山公園の上から市内を見下ろすと、ボロボロになった門脇小学校や、その周辺が更地みたいになっている風景が広がっていて、ショックを受けました。号泣したメンバーもいました。震災から2年経っていても、テレビで見るより自分の目で見た時のほうが、想像をはるかに超えた衝撃でした。

2019年にふたたび石巻市を訪問しました。市内の道路の整備が済み、ハード面での復興はだいぶ進んだ印象を受けました。雄勝小中学校では、演奏会前に行われた防災ワークショップに子どもたちと一緒に参加しました。2011年より後に生まれた子どもたちが小学校に入る時期でしたから、震災を知っ

ている世代が次にちゃんと伝えるという時代に入っているのだと、変化を感じました。

被災地に訪問して 演奏も変わった

東北への訪問を通して、聴いてくださる方の状態や気持ちを考えながら演奏することや、その人の気持ちにどうやったら響くだろうかと、一層考えるようになりました。特に東北の方には、切なさを残すような演奏をあまりしないように、「明日から頑張ろう」という気持ちになってもらえるように心がけました。その時の世間の状況に合わせて、演奏する演奏家にならないといけないのかなと思います。また、僕は日本フィルの中では、ちょうど橋渡しの世代なので、先輩たちの話を聞いて、僕らも参考にしながら演奏して、僕は僕で後輩に繋いでいきたいと考えています。



女川野球場仮設住宅にて、住民の皆さんと(2013年3月、石巻市)

仮設住宅の方々のためにサロン活動を定期的に関催 音楽にできることがあると思っている

社会福祉法人こ〜ぶ福祉会
こ〜ぶのお家いしのまき 元施設長

横前 誠



温かみのある 胸が熱くなる演奏会

当法人として地域貢献を担っていく必要があり、石巻市内でも幸いにも施設の場所までは津波被害を受けない地域だったこと、施設の近隣に仮設住宅が多く建設されたこと、施設内に交流サロンのスペースがあったということで、震災後は仮設住宅の方々を中心にサロン活動を定期的に行なっていました。

震災から2年が経過した2013年頃は、津波で大きな被害を受けた街並みは空き地が広がっていた頃でした。住み慣れた場所での生活を送り続けることができず仮設住宅での生活の中で新たな関わりもあり、皆さん様々な思いを胸に生活をされていました。先々のことを考えれば不安が多く、我慢することも多かったと思います。高齢の方の中には、仮設住宅で生活する方であれば、子どもさんと同居しての生活へと変化があった方もおりました。

日本フィルさんの演奏には近隣の仮

設住宅の方々、地域の方々が来所して80名近くが参加しました。静かに演奏を聴くだけではなく、演奏者の方々との関わりやふれあいの場面がありました。このような機会はなく、演奏はなじみのある曲が多く演奏に合わせて口ずさむ様子もあり、参加した方々からは口々に「良かった」との言葉が聞かれ、温かみのある胸が熱くなる演奏会でした。

当時は仮設住宅から災害公営住宅への転居が早々に決まった方、決まるまでに時間がかかった方など、一律ではない状況でした。震災後、今まで生活を行っていた地域から仮設住宅へ移り住み、新たなコミュニティができましたが、再び災害公営住宅へと移り一からコミュニティを作っていくことへの精神的な負担や環境の変化は大きかったと思います。

被災地への思いを 抱いている方々の受け皿に

サロン活動には、近隣の仮設住宅からであれば歩いて来ることができま

したが、転居後の災害公営住宅からでは距離的に歩いて来ることができず参加できなくなってしまった方もおられます。生活の場は変わっても、集まれる場所は今までと同じようにあったほうが良いと思い、サロンの定期開催は続けて行ないましたが、参加人数は少なくなっていきました。高齢になればなおさら、自分で出かけられる範囲が限られてしまうこともあるので、今までの関わりや、つながりを維持していくこと、さらに新しい場所で関わりを始めていくことの難しさがあると思います。

住み慣れた地域で生活が続けることができずに、生活の場を変えざるを得なかった方など皆さんそれぞれの事情があり、考え方や感じ方も様々なので共有することはなかなか難しい面があるでしょう。当施設では、年月が経つにつれてボランティアの方などの訪問も減少するなかで、被災地で活動をしたいという思いを抱いてくれる方々の受け皿になれればという思いがあり、日本フィルさんの訪問も受け入れてまいりました。また、近年も訪問を続けていただいたことで、自分達が「忘れられていない」という認識を持つこともできました。

今まで複数回訪問をしていただき、毎回参加者からは大きな反響があり訪問・演奏を楽しみにされている方々が多くいらっしゃいました。演奏者との距離も近く、いつも温かみのある時間を過ごすことができました。聴かれた方々は皆さんそれぞれ感情を抱かれたと思います。音楽にできることがあると思っています。ありがとうございました。

被災地活動の葛藤と経験が、最大の収穫 「風のような」音楽を社会の共有財産にしたい

日本フィルハーモニー交響楽団 元事務所職員
富樫 尚代

トロンボーン奏者
伊波 睦

被災地に行くことへの 葛藤と阪神淡路の経験

伊波 震災当時、私は組合の仕事をしていて、平井理事長に呼ばれた時は労働条件の話をするのかと構えましたが(笑)、東北の支援に行きたいというお話だったので、阪神で経験してきているからできますとお返事しました。阪神淡路大震災の時、大阪の楽団は動ける状態ではありませんでしたが、日本フィルでは支援者の方々が「お金を集めましょう」と動いてくれて、「音楽家なのだから演奏を届けたらどうか」と提案を頂きました。そうして日本フィルが最初に神戸に行きましたが、最初は「日本フィルは売名行為をやってる」という声もありました。しかし、そうし

た誤解も次第に解けていきました。

富樫 震災直後、積極的に被災地に行こうとする私たちの活動に対して、楽団の中には否定的な意見をもつ人もいました。それは悲惨な状況に身を置くことへの感覚的な恐怖と現場に踏み込んで行くことへの躊躇、何よりも楽員を危険に晒していいのかという感情だったと思います。そうした中でも多くの楽員が被災地の活動を理解して前向きに行ってくれたのは本当にありがたかった。そこには日本フィル特有の経験が影響していると思います。

阪神淡路大震災の時も最初は楽団内の調整が難航しました。しかし行きたいと手をあげてくれるカルテットのメンバーがいて突破口を開いてくれた。被災地への支援活動はこの人たちの個

人的な活動ではなく「オーケストラの楽団の正式な活動」として認めてほしいと訴えて、どうにか理解を得ることができました。

活動をつづけることで 得たもの

富樫 震災から3年経っても、被災地の状況は何も変わっていませんでした。活動範囲も広がり続けていて、とても3年で止めるという状況ではありませんでした。活動をしている中で、様々な方と繋がれたのが最も大きな経験でした。女子美術大学のヤマザキミノリ先生は学生を連れて活動をしていてアートの分野でのトラウマへの向かい方を学びましたし、ニコスの社員ボランティアの方々と一緒にできたのもあ

2017年12月、古市内の全小学生を対象にして行った参加型「動物の謝肉祭」で、伊波はファシリテーターとしてコンサートをデザインした。
(宮古市民文化会館)



りがたかった。化粧品会社や収納アドバイザーの方々の専門性を活かした活動には、精神的なケアについての様々な方法がしめされていて、とても感銘を受けました。

伊波 事務所のサポートもしっかりしていたから、楽員は演奏に集中できました。多くの楽員が、被災地での活動を通じて自分たちが必要とされていることを感じ、音楽家の役割を感じることが喜びになっていたと思います。

原町第一中学校との出会い、地域の文化を活かしたプログラム作りへ

富樫 初めて南相馬市を訪問した時、学校の先生たちは恐縮して生徒もがちがちになっているけど、原一中は阿部先生と子どもたちの関係が強くて、真剣度が違うという印象でした。だからこそ、ここには続けていくべきだと思いました。

伊波 2016年、原一中吹奏楽部の生徒と音楽ワークショップを行いました。ジョン・ケージをテーマにした音楽創作の手法に、ワークショップというのが何なのか知らない先生も生徒もびっくりしていました。この経験を経て、子どもたちにもっと刺激になるものを作っていこうということになりました。

東北ではマイケル・スペンサー氏と、その土地の文化を取り入れたワークショップを作り出しました。南相馬では博物館を舞台に、地元の野馬追に代表される武士道と西洋の騎士道(リ



ヒャルト・シュトラウス／ドンキホーテ)を対比させました。岩手県大船渡市では、地元で伝わる鎧剣舞の子ども達とワークショップを行いました。剣舞は平家の落武者の靈魂の話で、それに関連する作品(サンサーンス／死の舞踏)を題材にして交流をしました。

マイケル・スペンサー氏はたくさんの引き出しを持っていて、郷土芸能であろうと西洋音楽であろうと共通のエレメントを引っ張り出して、文化的に豊かな体験を作ることができたと思います。

音楽ならではの「軽やかさ」と、社会の共有財産としての音楽

富樫 日本人は何かしてもらおうということに対して負担に思う気持ちがある

と思います。中でも特に東北の人たちは遠慮深く、多くを求めない人たちだなと感じます。だからこそ「こんなに辛いんだ」ということを言わずに来てしまったのかもしれない。私たちが目指してきたものというのは、自分たちがやることによって相手に負担に思わせてはいけなくて、風のように通り過ぎるもの、音楽はまさしくそういうものだと信じて、続けてきました。

コロナ禍でこれ以上の物質的豊かさよりも何が幸せをもたらすのかが見えてきたと思います。オーケストラが再開された時、コンサート会場に来てくださった方々の表情には「生きてよかったよかった」という喜びと開放感があふれていました。音楽が社会にとって必要な共有財産だと認めてもらうことが、とても重要だと思います。

アートとレジリエンス

女子美術大学名誉教授
ヤマザキミノリ



女子美術大学アートデザイン表現学科の学生達による被災地支援活動オモドックと日本フィルハーモニー交響楽団の「被災地に音楽を」は、10回にわたり協働して活動してきました。震災後、私と学生達は被災地支援の在り方について、アートの有効性を模索していました。2011年5月に仙台の東北大学臨床心理研究室主催でInternational Medical Corps (IMC) による緊急心理支援セミナーが開催されることを知り参加しました。そこでは世界中で起こる紛争、災害、パンデミックと言った緊急事態に於いて、医療支援による物理的治療に続いて、メンタルなケアの必要性、つまり緊急かつ継続的な心理支援の必要性と有効性についての国際的な取組事例の説明を受けました。破壊された地域と痛んだ生活の中で、心理的ダメージを負った人々の心の復興には、寄り添い傾聴し共感することによって治癒する事と、その継続が結果として個々人のみならず、街やコミュニティの復興スピードを速めるという事を知ることができたのは大収穫でした。私も含め美大生の多くは、芸術は一人で表現するものと思い込んでいました。芸術は精神のレジリエンスを呼び覚ます力を持ち得ていること、ともに歌ったり踊ったり、作ったりすることの有効性を日本フィルハーモニーの皆さんとその後、石巻や気仙沼、名取、福島など数々の現場で、参加者と一緒に体験し、再認識することとなりました。



クラウドファンディングREADYFORで支援金を集め出版された「町を守った龍木」 作・絵 まつだ はるか

津波で海岸沿いから内陸に運ばれ、やがてこの地に流れ着いた流木を地域の子ども達の力を借りて、水を治める神としての龍木に変身させたプロジェクトです。当時大学3年生でリーダー格だった松田春花さんは、この体験を元に「町を守った龍木」という絵本を卒業制作し、更にクラウドファンディングで出版しました。現在はパッケージデザイナーとして活躍しています。学生達との現地アートアクティビティーは8年間で30回、参加人数は延べ約300人となりました。



震災の年から拠点的な場所となった石巻市八幡町のアトリエDaDaで、日本フィルと女子美オモドックとの最初の協働アートアクティビティーの様子です。



「つくて奏でて楽しもう♪心と心をつなぐ音♪」2012年8月8日 宮城県石巻市八幡町のCafe川辺りの散歩道内アトリエDaDaにて

音楽に励まされ、救われた10年間に感謝しています

南相馬市立原町第一中学校 元吹奏楽部顧問

阿部 和代



「音楽をやりたい」一心で再開した部活動

10年。振り返れば、すぐそこに10年前のあの時があるような感覚。でも実際は、あの時中学生だった生徒たちはすでに社会に出て活躍中。10年という歳月が長いのか短いのか……。

「先生、どうして同じ南相馬市なのに、鹿島区にはアイドルや有名人が来て、原町区には来ないの?」「それはね、原町区が原発から30km圏内だからだよ。だから、学校も鹿島区でやっているでしょう。」そんな会話をしながら、大震災、原発災害後の日々を過ごしていました。「先生、部活やろう、楽器吹こう、楽器ここに持って来よう。」生徒たちは音楽がやりたくてたまりませんでした。また一緒に原町第一中学校吹奏楽部として演奏活動を行うことは彼らにとって当たり前のことだったので。校舎は隣の区の小学校の体育館。教室はパネルで間仕切り、部活動は週に1～2回、そんな非日常の環境の中で、彼

らは音楽を欲していました。自分たちで特設ステージを組み、指揮台を組み、演奏ができるように環境を整え、やりたい一心で部活動を再開させたのです。

日本フィルの音楽に心をつかまれた生徒たち

震災の翌年、日本フィルさんとの出会いがありました。「被災地に音楽を」のプロジェクトで南相馬市の中学校にクリニックに来てくださったのです。クリニックのみならず、生徒たちのために演奏もしてくださいました。生徒たちは本物の音楽に触れ、どんどん目が輝き、表情が生き生きしていくのがわかりました。音楽に心をつかまれたのです。わしづかみにされて揺さぶられ、「楽しい」を実感したのです。生徒も私も、震災後ずっと張りつめていたものが緩んでいく瞬間でした。その時は、まさか現在に至るまで、日本フィルさんとの交流が続いていくとは考えもしていませんでした。

クリニックのみならず、演奏会への

招待、演奏会での共演、ワークショップ、個人的な相談など、出会いから現在まで、関りが深まっています。このコロナ禍にあってもリモートやビデオレターを通して関りをもってくださることに感謝しています。日本フィルさんの被災地支援は、1回をみの付け焼刃的な支援ではなく、継続的に深く関わって支援していこうという熱い想いを感じさせます。その結果、音楽を専門的に学びたいという生徒が出てくるようになりました。自分が得た感動を他の人にも伝えたい。…と。

激動の10年を支えてくれたのは音楽

私たちは生徒も保護者も、そして地域も、日本フィルさんの音楽に励まされました。楽器を吹きたい、音楽をやりたい。そんな私たちの想いを受け止め、いつでも手を貸してくださったこのプロジェクトに御礼を申し上げます。私事ですが、この10年は激動の時代でした。震災後、無我夢中で生徒と音楽をやり、日本フィルさんの支援のおかげで成果を上げ、充実した時を過ごしました。そして難病を患い、教職をリタイアしました。しかし、ありがたいことにまだ生徒とともに音楽を奏で続けさせてもらっています。

声を大にして叫びたい。音楽に救われました。今も助けられています。音楽は素晴らしい!!

日本フィルさん本当にありがとうございます!! 今後ともよろしく願いいたします。



「当たり前」に続いていく、原町一中の吹奏楽

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 研究員 落合 千華



「部活動は、いつ再開しますか」

当時の南相馬市立原町第一中学校吹奏楽部顧問、阿部和代先生に、部員たちからメールや電話が届いた。東日本大震災発生から数日。状況把握もままならぬまま、生徒たちは家族と共に、北海道から沖縄まで、まさに散り散りに避難していった。いつ戻れるかわからない状況下、みな部活動への想いを募らせ先生へ連絡を入れたのである。



2021年、震災から10年が経つ。慶應義塾大学SFC研究所が日本フィルハーモニー交響楽団（以降、「日本フィル」とする）の被災地における活動の調査に関わってから、3年目になる。この節目に、調査対象を南相馬市立原町第一中学校（以降、「原町一中」とする）の吹奏楽部に絞った。日本フィルが継続的に活動を行ってきた地域であり、一つのモデルとも言える深い関係性があるからだ。約10名の方にお話しし、日本フィルについてのこともそうでないことも、それぞれが過ごした10年間についてヒアリングをさせていただいた。限られた時間の中、震災を直接経験していない私が行くことによって、情報収集、理解が断片的となることに心苦しさもあったが、卒業生、保護者、先生などが皆さん、時間をかけて言葉を紡いでくださった。

ヒアリングで私が驚いたことの一つに、原町一中の震災直後のコンクール戦績がある。2011年秋、部員数激減にもかかわらず、彼らは福島大会で金賞を受賞したのである。過去継続して東

北大や全国大会に出場し、優秀な成績を収めた実力を持つものの、混乱の中での金賞は並大抵のことではない。当時二年生だった卒業生は、このことを部活動の中で一番嬉しかったことの一つに挙げた。阿部先生も、「避難先の体育館で部活動を再開し始め、打楽器を自ら軽トラで運ぶなど、とにかく必死でした。余震もある中練習をし、警報が出たらすぐに逃げよう。コンクールには出られるように楽器を持って逃げよう、と生徒たちとっていました」と振り返った。音楽への執着心とも言える強い想いを感じるが、「とにかく当たり前のことを当たり前にしたかった」と先生は言う。避難先からすぐにでも学校、部活動に戻りたかった生徒たちも、同じ気持ちだったのだろうと思う。

2012年の4月、混乱から徐々に回復する原町一中に、日本フィルが楽器演奏の指導に初めて訪れる。年度初めという忙しさと、プロの受け入れへの不安から、正直身構えていた状態だったと阿部先生は言う。時をほぼ同じくして日本フィルとの関わりが始まった現地の支援者、上條大輔さんも、企業等による多くの支援があった中「最初はちょっとよくわからない」という感覚だったようだ。しかし二人とも直接日本フィルの音楽を聴き、子どもたちが元気になるなどの変化を見、日本フィルの人々と話をする中で、人同士の腹を割った関係が生み出されていったと教えてくれた。今や上條さんと日本フィル関係者は気軽に連絡を取り合う仲でもあり、家族のように一緒にどこか旅行に行きたいねと、仲睦まじく話すくらいなのだ。

原町一中関係者と日本フィルの、こ

の密な関係性こそが10年間の活動を支えてきたのであり、また10年間の活動によって、この関係性が継続してきたとも言える。この関係性には大きく二つのことが寄与していると思う。一つは、子どもたちのことを「長期的に本気で」考えていること。もう一つは、根本的に音楽という共通言語で深くつながっていることだ。

日本フィルの人たちは、常に子どもたちに真剣に向き合ってきた。単に演奏を届ける、教えるというような姿勢ではない。それは震災直後に「長期的な活動をととして、一人でも音楽家を目指す生徒が出てきたらよいね」と、ある楽員が上條さんと話し合ったことにも表れる。実際に今、音大に通い、プロを目指す卒業生が出てきている。毎年のように原町一中を訪れ、卒業生に名前を覚えられている楽員も複数いる。阿部先生が生徒たちの自発性や積極性の弱さに悩んだ時には、楽器指導や演奏ではないワークショップの形を提案。結果的に先生も保護者も、生徒たちの自発性に新しい可能性を感じたと言う。支援だから仕事だからという「形式」ではなく、枠を超えて子どもたちのことを真摯に考えているからこそ、一

人の人として向き合い、対話をととして活動を積み上げてきているのだ。

また、ヒアリングした方々から印象深いこととして多く挙げられたのが、荻窪音楽祭(14ページ参照)での演奏だ。彼らは皆、そこで音楽そのものの美しさ、楽しさに触れたというエピソードを話してくれた。3年生にとっては引退公演で、まさに集大成の演奏であり、涙なしには語れないこと。コンクールとは違い、良し悪しではなく純粋に音楽を楽しむこと。日本フィルの人と一緒に演奏する機会であり、自分たちの演奏がより深く引き出されるということ。「音楽祭の場には何かがあるのではないか」と思うくらい、感動を素直に共有できる場、賞賛の拍手があふれる環境が、毎年そこにはあるという。音楽という共通言語、音楽そのものの公共的な価値によって、原町一中、日本フィル、荻窪音楽祭の人々がつながるのである。

日本フィルの活動はこれからも続いていく。南相馬市でも他の地域でも同

原町第一中学校 吹奏楽部コンサート
 ~日本フィルハーモニー交響楽団のアンサンブルを迎えて~
 2018年10月8日(月/祝)
 13:30開演[13:00開場]
 ゆめはっと [入場無料・全席自由]
 (南相馬市民文化会館 大ホール)

ストラヴィンスキー:「兵士の物語」
 演奏 日本フィルハーモニー交響楽団アンサンブル
 指揮 藤谷剛次郎 / 台本 三枝木宏行

【合同演奏】
 ホルスト:「惑星」より「火星」「木星」
 【ゲスト出演】
 原町第三中学校 吹奏楽部
 原町第二小学校 合奏隊

文化庁委託事業「平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業」
 日本フィルハーモニー交響楽団「被災地に音楽を」
 【主催】文化庁/原町第一中学校吹奏楽部/公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団
 【共催】南相馬市教育委員会 【後援】南相馬市
 【協力】妙蓮区/荻窪音楽祭(「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会)

じように、それは子どもたちと向き合い、一人一人とつながり、音楽という共通言語をととして紡ぎ出されていくだろう。これらの要素は元々地域に内在するものである。日本フィルは外から何かを授けるのではなく、地域に元々あるものを復興し、深化させる役割を担ってきた。これからも当たり前、子どもたちのための活動が各地域で続いていくために、日本フィルの活動が続くことを願う。





「東北の夢プロジェクト2019」宮古高校との共演(2019年8月、盛岡市)

[3]

2017年～2019年

子どもたちの 笑顔と夢のために

日本フィルのこれまでの被災地への取り組みが評価され、「被災地に音楽を」が2017年度の「文化庁戦略的芸術文化創造推進事業」に採択されました。この事業では、文化を通じて日本の創造的な未来を拓くための先行投資として、調査研究の費用が認められています。日本フィルでは三菱UFJリサーチ&コンサルティングに事業の調査研究を依頼しました。その結果、これまでの事業が各地でのニーズを捉えていたこと、そして被災地のニーズが時とともに変化しており、震災直後に特に必要とされていた「心のケア」に加えて「文化芸術に触れる機会」「地域住民の交流の機会」「被災地の現状を外部に発信する」ことへの要望が高まっていることが分かりました。

こうした新たなニーズを強く意識し、被災地での活動を現地の状況に合わせて〔鑑賞型→参加型→協働企画型→現地主導型〕と、順次変化・進化させていくことを計画しました。その結果、参加団体やコミュニティとの連携が深まり、現地の方々も、より積極的に活動に参加して頂けるようになりました。こうした経験を基に、「被災地からの文化発信」を応援するための「東北の夢プロジェクト」構想が生まれました。その目的は子どもたちの夢と未来、笑顔を応援し、交流と発信の場づくりをすることです。こうして日本フィルの東北地方への取り組みは新しいステージに入りました。



「ばばば! オーケストラ」赤澤鎧剣舞の演舞(2018年8月、大船渡市)

被災地の様子と日本フィルの取り組み

「被災地に音楽を」レポートより抜粋

◇被災地の様子

2017年

岩手県

宮古市

10m近い津波が押し寄せた鯉ヶ崎地区には、新しい住宅が建ち復興住宅も近くにできている。

宮城県

石巻市

鮎川地区は震災後に人口減少が続いており、存続の危機に瀕している。

福島県

二本松市

浪江町の方々が避難して来られている。「避難地域は時間が止まったままで、復興までの長い道のり、必要な時間を考えさせられました。看板を境に向こうは避難区域、こちらは住める区域、と分かれるところでは、数メートルしか離れていないにもかかわらず自分の家に住める人と住めない人がいる状況に、案内して下さった方からの『空気に壁はありますか?』との問いが、深く心に残りました」

南相馬市

震災から6年経ち、子どもたちの心の発育に懸念があるという声が聞かれた。震災後の不安や不便な生活を強いられる中で、親は子どもを過度に守り、また子どもは親の顔色を窺い続けた結果、子どもたちが内面に自分自身の希望や主張を押し込めてしまい、積極性や自発性を失ってきているという。

2018年

宮城県

石巻市

川の上地区の学びの場として作られた百俵館に、耕人館、たねもみ広場がオープン。耕人館は子どもたちの自主学習の場がほしいという要望から作られた(全国学力テストで宮城県の成績が低迷)。

山元町

2017年山元町防災拠点センターつばめの杜ひだまりホールがオープン。前回(2016年)訪問時は近くにあった仮設住宅も、2017年春には取り壊された。住環境の安定の一方で、地域住民同士の交流の場が求められている。

福島県

富岡町

2017年4月に帰宅困難区域を除き避難指示解除。富岡町文化交流センター学びの森(町役場に隣接する複合施設)が2017年4月に再開。富岡町の小学校2校、中学校2校が富岡町立富岡小中学校となり、2018年4月に7年ぶりに再開。20人前後の児童生徒が在籍している。富岡町の石井教育委員長によると、2018年10月現在700人程度の町民が戻ってきており、その半分以上は高齢者。

◇日本フィルの取り組み

10月

福島県南相馬市南相馬市博物館にて「武士道と騎士道」をテーマにマイケル・スペンサーによるワークショップを実施。

11月

宮城県石巻市鮎川小学校にてマイケル・スペンサーによる「MUSICIRCUS」のワークショップを実施。



12月

岩手県宮古市民文化会館にて「動物の謝肉祭」を市内小学1、2年生を対象に披露。トロンボーン伊波陸がファシリテーターを務める。

5月

宮城県石巻市、百俵館にて近くの二俣小学校6年生の児童が「河北の春」をテーマに地域の自然や春を思い浮かべて詩を創作し、朗読。ヴィヴァルディ作曲《春》の演奏と共演を行った。

あとりえDaDaにてクラリネットとフルートの吹奏楽部生徒、モダンダンスを習う中高生10人とそれぞれ共演。関係者からは「夢が叶った」との言葉。

8月

岩手県大船渡市にて、舞踏の国際フェスティバル「三陸国際芸術祭」の連携事業として、「赤澤鎧剣舞」を受け継ぐ子どもたちとの共演を盛り込んだ参加型コンサートを実施。

9月

岩手県宮古市にてジュニア・アンサンブルみやこへの楽器クリニックを実施。

◇被災地の様子

葛尾村

震災後、三春町に分校が開校したが、2018年3月に閉校となり、同年4月に葛尾村にて小学校と中学校が同じ校舎で再開した。小中学校合わせて児童生徒は17人(10月時点)。校舎には様々な多目的室があり、学校を核とし地域の方が集まる場を目指している。学校のすぐ近くには、葛尾村復興交流館が、地域の方の交流の場、情報収集の場として同年6月にオープン。

2019年

宮城県

石巻市

多くの方が災害公営住宅への移転を終えるなか、県内最大規模で集団移転した二子団地では、異なる文化をもつ住民同士のコミュニケーションをもつため、町内会によって様々な交流イベントが開かれていた。

***二子団地は350世帯が住まう県内最大級の集団移転の災害公営住宅団地。**

山元町

常磐線が仙台から原ノ町まで開通。「宮城の湘南」と言われる比較的温暖な気候が手伝い、野菜、果物、海産物などの新しい品種が生み出され、地元産業も活性化の兆しをみせている。元からの住民と新たに移転した住民との交流の場の創出が求められている。

福島県

川内村

村営のピアノ教室があり、村の小中学生30人ほどが習っている。共働き世帯が多く、児童生徒は学校を終えるとコミュニティセンターに集まり、センターが学童のような役割を果たしている。

2019年11月25日 山元町
「つばめの森ひだまりホール」で
チェンバロ、ヴァイオリン、
ソプラノのコンサート



◇日本フィルの取り組み



2018年10月2日 福島県富岡町「学びの森」でコンサート

10月

初めて富岡町を訪問し、富岡町文化交流センター学びの森にて公演。三春町の御木沢小学校にて富岡小三春分校と合同で演奏会を実施。この公演をきっかけに2校の交流がスタート。

福島県南相馬市の原町第一中学校吹奏楽部の定期演奏会に初出演。ゲストステージとして、ストラヴィンスキー作曲《兵士の物語》を演奏。

5月

宮城県石巻市雄勝小中学校にて、児童生徒とともに防災ワークショップを受講。

8月

岩手県盛岡市岩手県民会館にて「東北の夢プロジェクト2019」を開催。

10月

前年の日本フィルの演奏に触発されたという福島県葛尾村葛尾小中学校の児童が、学校の目の前にオープンした復興交流館あぜりあでクリスマスコンサートを開き、児童が司会を務めるなど初めて活動。

三春町内の小中学校全6校と富岡町立小中学校三春校の代表がリコーダーで日本フィルの弦楽四重奏と共演。

前年三春町立御木沢小学校で行った富岡町立小中学校三春校の児童生徒を招いた合同コンサートがきっかけとなり、他の授業でも交流が始まる。

11月

原町第一中学校卒業生が、荻窪音楽祭フレッシュジュニアコンサートにて日本フィル楽員とクラリネット五重奏曲で共演。

福島県川内村にて、日本航空株式会社と共同主催で小中学生を対象としたワークショップを実施。宮城県山元町の中学校で眠っていた、復興支援として贈られたチェンバロをつばめの杜ひだまりホールへ移送、調律し公演を実施。

コミュニティ作りのための「百俵館」に日本フィルを迎えられた感動 日本フィルと地域住民が一緒になって作っていききたい



川の上・百俵館

後に平井理事長から「また来るからね」と声をかけていただいた地域の人たちが、2018年に日本フィルの再訪を受けた際、どれだけ感動したことでしょうか。「今度はどんなおもてなしをしよう」と、地域の人たちが古くからの友を迎えるように、楽しそうに色々と思案していました。コンサートには百俵館に程近い二俣小学校の6年生の児童6名がご一緒させていただき、児童が創作した地域の自然と春を思いにした詩の朗読を背景にしながら、弦楽四重奏によるヴィヴァルディの《春》が演奏されました。子どもたちの雄姿が、その家族のみならず地域の大人たちの気持ちを大いに奮い立たせたのは言うまでもありません。演奏者と聴衆の心の距離が近づいたことで、会場はとても心地良い温かな気持ちで包み込まれました。演奏会という限られた時間だけでなく、その前後に、多くの人間的関係性が育まれていることが垣間見られる経験でした。

日本フィルの来訪に歓喜

百俵館をつくりあげる際、地域住民を巻き込んだ場をつくりだすため多くのワークショップを実施し、百俵館が「ありたい理想の姿」を考えました。このプロセスにお付き合いくださったデザイナーの藤代健介さんと平本知樹さんが、日本フィルの「被災地に音楽を」を担当している富樫尚代さんとお知り合いだったことがご縁で、藤代さんや平本さんから「日本フィルさんが百俵館でいつかできると良いですねと言っていたよ」と伝えられた際は、大変な驚きと共に、ものすごく嬉しかったことを今でもよく覚えています。その後、富樫さんから石巻地域に音楽を届ける先として百俵館を訪問したいというご連絡をいただき、地域の色々な人と喜びを共有しました。

子どもたちの雄姿に 大人たちが奮い立つ

2016年11月1日、そして2018年5月23日

に、川の上・百俵館にて日本フィルによるコンサートを開催しました。コンサートを楽しみに地域住民の方が多数来館し、バックヤードから椅子をかき集めても足りない来館者で、会場は沸き立ちました。椅子を出す作業を平井俊邦理事長自ら先頭に立ってご協力いただき、演奏後に理事長からご挨拶をいただいた際、地域の人たちが驚いたのは言うまでもありません。懇親会の



平井理事長(写真中央)

一般社団法人石巻・川の上プロジェクト理事・運営委員長／
杏林大学総合政策学部准教授

三浦秀之



共に作り上げることが、 生きがいになる

震災から7年目に石巻最後の防災集団移転である「河北団地」が完成したことで、ほぼすべての被災者の方たちが、仮設住宅を出て恒久的な住居というハードを手に入れることとなります。しかし、住まう場所ができて、衣食住が満たされることによって最低限度の生活は出来るかもしれませんが、やはり、その後重要になるのは「生きがい」であったり「やりがい」という目には見えにくいソフト面なのではないかと思えます。

こうした中で、自分たちが主体的に関わることができる場や機会（イベント）の創出がますます重要になってきたのではないかと思います。そうした中で、つくられた場ではなく、ともに作り上げるという姿勢が最も重要であると感ずます。つくりあげるプロセスを共有することでその場に対する愛着も芽生え、そこが自分の場であるという認識になるのではないのでしょうか。そうした機会をいかに増やしていくかが、これからの重要なテーマであると思えます。集まる人たちがお客様のよう受け身で参加をするのではなく、自らがホストであるという主体性をいかに喚起するか、自分たちが何かを創出できるという学びのきっかけにいかにするか、今後も継続できるための基礎をいかに構築するか、がとても重要だと考えます。今後、日本フィルと地域の人たちが、一緒になって何かをつくり出せる機会があれば、とても有難い



子どもたちが創作した詩の朗読とともに（2018年5月、石巻市）



思いです。

私たち石巻・川の上プロジェクトの取り組みは、地域住民が集まり、お互いを知るための「きっかけ」をつくることを目標としていますが、その先には、地域住民がお互いのことを理解し、温かなコミュニティを構築する

ことがあります。その和やかで温かな機会を提供していただいた日本フィルハーモニー交響楽団の皆さんに、心から感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、音楽がもたらす奇跡を信じて、活動を細く長く地道に取り組んでいきたいと思えます。

東北の夢プロジェクト2019

小さな力がつながって、継続した活動になることの大切さ



「東北の夢プロジェクト2019 楽しいオーケストラ in 岩手」は、お盆に向かう連休に入ったばかりの2019年8月11日(日)、盛岡市の中心、中津川のほとりにある岩手県民会館大ホールで盛大に開催された。日本フィルが40年間続けてきた夏休みコンサートの2019版をベースとする内容に、岩手県沿岸で活動する子ども達による伝統芸能と吹奏楽が加わる盛り沢山なプログラムである。そしてこの日のコンサートは、実に多くの人々の願いと力がつながって出来あがったものだった。

東日本大震災発生後、日本フィルは271回、被災地で支援活動を行って来た。震災から8年以上が過ぎ、被災地では復興住宅や巨大な防潮堤が完成するなどハード面での復興は進んできたが、新たな課題も生じている。そんな今こそ必要なのが被災地の子どもたちや被災された方々の心の復興であり、それを後押しする音楽などの文化・芸術

活動である。一人でも多くの人々がこの活動に心を寄せ、その大切さを理解することが何よりの推進力になるはず。そんな思いの下企画され、たくさんの地道な活動から生まれた気づきと、人と人との縁を大切にしながら、少しずつ大きなムーブメントを作り出して行くのが、東北の夢プロジェクトである。

6月30日(日)、津波によって全てが流されてしまった大船渡駅前に整備された地区に近年オープンした市民の交流館 おおふなポートで日本フィル 弦楽四重奏団によるヴァイオリン体験会&ミニコンサートが行われた。体験会の参加者は、ほぼ全員が初めて弦楽器に触れる子どもたちだったが、楽器を手にすると、難しいと首を傾げながらも一生懸命挑戦し、一度体験を終えるとまた列の

最後尾に並び直す子もいるなど、大盛況であった。2回のヴァイオリン体験会の合間にあたる45分程の時間には、弦楽四重奏のミニコンサートが行われた。童謡やアニメの主題歌をアレンジした誰もが口ずさめるような曲から、本格的な弦楽四重奏曲まで6曲ほどを演奏した。

翌7月1日(月)に盛岡で行われた、日本フィルハーモニー交響楽団 東北の夢プロジェクト2019プレ企画「岩手銀行赤レンガ館 ランチタイム・コンサート 楽しいアンサンブル」と題する弦楽四重奏によるコンサートも、大盛況であった。弦楽四重奏団の4名は、前日の大船渡での体験会&ミニコンサートとバス移動の疲れも見せず、様々なプログラムを熱演。来場者から鳴り止まないほどの拍手喝采を浴びた。

そして、プレイベントからひと月半が過ぎた8月11日に行われたのが、「東北の夢プロジェクト2019 楽しいオーケストラ in 岩手」である。開場と同時にたくさんの小さな子どもたちが嬉しそうに階段を上ってきた。エントランスでは、木管三重奏によるウェルカムコンサートが開かれ、来場と同時に美しい音色に包まれて、皆びっくりして



聴き入っていた。

第1部では、大編成のオーケストラによってまずチャイコフスキー：バレエ《眠りの森の美女》より「ワルツ」が軽やかに演奏されると共に、やさしい解説もなされる。最後はホルスト：組曲《惑星》より「ジュピター」で壮大に締めくくられた。第2部では、プロコフィエフ：バレエ《シンデレラ》[日本フィル夏休みコンサート2019版]が、オーケストラのドラマティックな音楽と、力強くも繊細なバレエによって、華やかに繰り広げられた。

第3部は岩手県沿岸で活動する子どもたちによる伝統芸能と吹奏楽、そしてフィナーレである。赤澤鎧剣舞は江戸時代から大船渡の旧赤澤地域に伝わる民俗芸能で、大船渡市無形民俗文化財第一号に指定されている。鎧装束に身を包み、ささらで独特のリズムを刻みながら舞う一人の演者に挑むかのように、10人の子どもたちが腰を落とし、足を踏み鳴らしながら力強く舞い踊る。舞台を降りれば、小さくあどけない少女たちであるが、会場の空気を緊張感あるものに高める力は本物であった。続いて宮古高校吹奏楽部の57名がマスネ作曲(宍倉晃編曲)：歌劇《タイス》よりを演奏した。難しい曲であるが、日々練習を積んだ成果と、観客の雰囲気によって感動的な演奏となった。前日、日本フィルのメンバーが宮古高校を訪れ、指導にあっていた。フィナーレは、宮古高校吹奏楽部のメンバーもオーケストラの前に立ち、ラデツキー行進曲を演奏した。赤澤鎧剣舞

の子どもたちもステージに上がり、手拍子で会場を盛り上げた。3時間に及ぶ長時間のコンサートとなったが、最後まで子どもも含めて観客のみなさんが集中して楽しんでいる様子を感じられた。

今回岩手でプロジェクトを展開してみても、なるべく多くの人々にプロジェクトに関わってもらうことが大切であることが証明されたと思う。一人一人の力や関わり方は小さくても、それが集まり、また継続されることで、とても大きな力になっていく。ヴァイオリン体験会に楽器を提供してくれた方々、体験会の参加者や本公演に向けた被災地からの来場者募集に骨を折ってくれたみなさん、プロジェクトに賛同してポスターを掲示し、新聞やテレビで取り上げてもらうために奔走してくれた方々、そして何よりも素晴らしい演奏を聴かせてくれた日本フィルのメンバーと、暑い中公演に足を運び、たくさんの拍手を送ってくれた観客のみなさん。誰



が欠けても今回のプロジェクトは完成しなかった。そしてプロジェクトに関わった全ての人が、実にさわやかな充実した面持ちでいてくれたことが、何よりの次へのステップであると思う。

大きなスポンサーがドーンとお金を出して、プロジェクトを進めることも最初は重要であるが、長く継続させ、より意義のあるムーブメントにしていくためには、小さなスポンサーがたくさん集まること、それぞれの関わり方でプロジェクトを支えていくことが、特にこの東北での音楽を通じた支援活動には大切だと思う。



不安の中、子どもたちのために「東北の夢」出演を決断 誰かのために生きることの大切さを教えたい

岩手県立宮古高等学校 吹奏楽部顧問

よしはる
佐藤 允治



2017年に宮古高校に赴任。 生徒たちに必要なこととは

今の子どもたちには、「自分たちの意志」が必要です。様々な要因で、震災当時小学生以下だった生徒は「いい子」であり、「聞き分けのいい生徒」に育ったように思います。上の世代からの支援に寄りかかることが当たり前で、その支援を一つも疑うことなくありがたく受け取ることが処世術になってしまい、「自分たちの本当の気持ち」に気づいていない生徒が多いように思います。

音楽活動においては、「自分たちの意志」に加え「音楽をする心」「自分を認める勇気」が必要だと思います。音楽を好きでいるには、主体的に音楽に取り組むことが必要です。自分で自分を受け入れないと物事に主体的に取り組めないと私は考えています。生徒たちは、大人の期待に応えようとしすぎて自分の実力とのギャップに苦しんでいるように思

います。「自分を受け入れて、自分の本当の気持ちに気づき、思うがまま音楽に向き合うこと」が必要だと思うのです。

2019年、 「東北の夢プロジェクト」で 日本フィルと共演

出演の依頼があった時、「自分たちなんかでいいんですか？」という気持ちでした。「なんでお願いされたんだろう…。恥ずかしい演奏になるけど大丈夫かな…」と正直なところ感じました。宮古は都会ではありません。音楽ホールが多いわけでもなく、プロの音楽に触れる回数は、都市部に比べて圧倒的に少ないです。そういう中でプロとの共演でしたので、自分たちの音楽の現状はとりえず置いておいて、「彼らにとって将来に関わる大きな出来事だ」と思い、共演を承諾しました。

プロである日本フィルとの共演は私

にとっても、生徒にとっても光栄なことでありましたが、本当に緊張の連続でした。当時の3年生にとってはホールでの演奏は引退前の最後でしたので、思いはひとしおだったと思います。演奏そのものは夢プロジェクトの前に行われた吹奏楽コンクールよりもいい演奏ができたかと自負しております。あのときの拍手はすごく大きく聞こえまし

た。共演後は少しずつ自分たちで音楽を創ろうという意識が出てきているように思います。どうしてもプロとの交流は1回で終わってしまうことが多い中で、このような継続的な支援があることで生徒の音楽がより「音楽的」になっていると感じています。

宮古の生徒から学んだこと

宮古の生徒の特徴は、思いを言葉で表現することが苦手、のんびりしていることです。ですからどうしてもこちらで急かしてしまうことが多いです。しかし、一緒に活動していく中で、彼らに考えや思いがないわけではない、ということに気づくことができました。生徒たちが一生懸命に頑張れる瞬間は、「自主的」で「その活動に意義を見出す」ことができ、そこに本人たちの「納得感」が備わったときだけです。そこに行き着くには「任せる」ことが大事だと気づかせてもらいました。

「誰かのため」と 「自分のため」に生きる

震災が教えてくれたことは、「誰かのために生きることの素晴らしさ」と「自分のために生きることの重要性」だと感じています。生徒たちにはどんな仕事でも、それは誰かのためであり、自分のためであるということを理解してほしいです。日本フィルのこの“被災地のため”の活動もきっとそれ以上の“～のため”があるのだと思います。震災10年目を迎えた今、“～のため”を増やせるよう、さらなる交流をお願いしたいです。



「踊り繋ぐことこそ伝承活動」末代までの伝承を願う 日本フィルから全体で一つになることを再発見した

赤澤芸能保存会 会長／大船渡市郷土芸能協会 会長

平山 徹



日本フィルの活動に感銘を受け、ここまで繋がってきた「縁」

日本フィルと赤澤鎧剣舞とのお付き合いは2018年8月から始まります。「ばばば!! オーケストラ～赤澤鎧剣舞と出会う 音で楽しむ動物たち～」という企画で、大船渡北小学校郷土芸能部17名の部員が参加した音楽ワークショップが最初でした。2度目は、岩手県民会館大ホールで「日本フィル 東北の夢プロジェクト 楽しいオーケストラin岩手」の第3部ゲストコーナーで赤澤鎧剣舞を演舞しました。そして3度目となる2020年8月は、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下、大船渡市民文化会館リアスホールで無観客収録した剣舞の映像が、東京で行われた日本フィルのコンサートで披露されました。ここまでご縁が繋がり、日本フィルの皆さんとの共演を続けてきたのは、阪神淡路大震災、そして東日本大震災でも東北地方の多くの方々へ「音楽で元気を」と活動していること、中でも、子どもたちに西洋で生まれた特徴的なリズム

をテーマとしたワークショップや、郷土芸能を取り上げるという趣旨に、感銘を受けたからです。参加した大船渡市立北小学校「郷土芸能部」の生徒たちは、日本フィルのコンサートで楽器それぞれの持つ大小の音が一つの塊となり、全体でリズムを作ることを体感し、そこから郷土芸能の基本である所作も個々のパフォーマンスではなく団体演舞として成り立つものと自覚し、全員で完成させることの大切さを学びました。

担い手不足への危機感から小学校で「郷土芸能部」を立ち上げた

将来まで伝統芸能を継承していくためには、担い手不足が大きな課題です。ここ数年来、全国的に人口減少が進む中、芸能伝承の後継者たる若者の担い手が少なくなり、現役舞手の高齢化が顕

著になっています。未来への継承を考えたとき、子どもたちへの理解を深めることができないか、との思いから地元の小学校と連携し、昔から継承されている郷土芸能の所作や地元の歴史を学習する目的で大船渡北小学校に「郷土芸能部」を2013年に創部しました。学校の授業では習うことのできない教育の一環として、また先生以外の大人とのコミュニケーションも子どもたちにとって重要であると考え、現在25名の生徒が放課後に定期的に赤澤鎧剣舞の練習をしています。さらに、部員の中で、もっと習いたい、もっと上手になりたいという希望者が保護者の了解の下、学校だけでなく独自に稽古に励んでいるのです。彼らが「踊り繋ぐことこそ伝承活動」であるとの信念を持ち、将来は地元に残って赤澤鎧剣舞の主軸となり、末代まで伝承してくれることを願っています。





宮古高校吹奏楽部とのオンライン座談会(2020年6月、宮古市⇄東京都)

[4]

2020年以降

コロナ禍でも
音楽でつながった

2020年2月、日本国内で新型コロナウイルス感染症の拡大が始まりました。日本フィルもまた、大きな制約を受けることとなります。年間活動の大半が中止となり、緊急事態宣言の発令により楽団員が集まることさえ難しい状況の中、予定されていた被災地への訪問、そして二年目を迎えて岩手県・福島県で開催予定をしていた「東北の夢プロジェクト」もまた、中止を余儀なくされます。

そうした中で、やはり活動が立ち行かなくなっていた宮古高校吹奏楽部の生徒からの提案により、オンラインでの「音楽家と高校生の対話イベント」を開催、大人と高校生が音楽や人生について、真剣に語り合う場が生まれました。さらには事前に収録した演奏の映像も現地に届けました。この時、私たちはオンラインと映像を活用した新しい取り組みに大きな可能性を感じました。

夏には、本来であれば「東北の夢プロジェクト」に出演を予定していた岩手・福島の各団体の映像を現地の協力を得て制作し、都内でのコンサートの「映像ゲスト」として披露。そのコンサートの模様を宮古市・南相馬市でライブビューイングとして配信しました。こうして、コロナ禍という制約下でも「繋がりたい」という人びとの強い思いが、様々な手段を介して実現しました。



1日だけの「夏休みコンサート2020」feat.東北の夢プロジェクト赤澤鑑剣舞の演舞映像
(2020年8月、千代田区)



宮古高校との対話イベント
(2021年1月、盛岡市)

日本フィルハーモニー交響楽団×宮古高校吹奏楽部◎スペシャル座談会

「音楽家と高校生が本気で語りあう、 音楽と社会のこれから」

2020年6月7日、東京を拠点とする日本フィルハーモニー交響楽団(以下、日本フィル)の楽団員と、岩手県宮古市の高校生が、オンライン会議ツールを使ってつながり、音楽や未来について語りあいました。その対話は、音楽という誰にとっても身近なものを通して、さまざまな境界線を越えてお互いが気付きを得る、かけがえのない場になりました。



「プロの音楽家と話したい」 岩手の高校生の声

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて3月初旬から休校、そして、全日本吹奏楽コンクールの中止決定。それによって岩手県立宮古高校吹奏楽部の3年生は、5月末に部活動の引退が決まりました。仲間と、大好きな部活動ができない日々の寂しさに加え、目標を見失ったことによる落ち込みは想像に余りあるものです。吹奏楽部顧問・佐藤允治先生は、彼らに今、何をしたいか尋ねました。すると、3年生がこう答えたそうです。

「コンクールがなくなったのは悔しい。でも、今まで応援してくれた地域の方々には何かを残したい。それを考えるために、プロの音楽家と、音楽や社会について話してみたい」

彼らの声を聞きつけたのが、同じように活動の場を失っていた日本フィル。宮古高校吹奏楽部とは、2019年8月に盛岡市で行われた「東北の夢プロジェクト2019 楽しいオーケストラin岩手」でステージ共演をして以来、交流を続けていたのです。

日本フィルは、新型コロナウイルスの影響で2月下旬から定期演奏会をはじめとする演奏会等がすべて中止。チ

ケット収入もなくなり、楽員が集まって練習することができなくなりました。楽団として、本来の活動の場を失った状況で何ができるのかを悩みながら過ごす中、宮古高校の生徒が気になり、スタッフが連絡を取ったとき、前述の話を聞いたそうです。

座談会には、日本フィルから5名の楽員と、1名の事務所担当者が出席。宮古市民文化会館では、宮古高校吹奏楽部員57名と顧問の佐藤先生、宮古市の音楽家などが集まりました。

—「人に感動を与える音楽とは、どんなものですか？」

この質問に対し、橋本洋さん(トランペット)は「100名観客がいても、100名全員に好かれる演奏はきっとできません。なぜなら、感動の仕方は人それぞれ。プロの演奏より、子どもの演奏発表会のほうが、親にとっては感動的なこともあるでしょう。だから、自分が心からやりたいと思う演奏をやるのが大切。“すごい演奏をしたのだから、人が感動して当たり前だろう”という気持ちだったら、人の心は動かさないでしょう」と長年音楽家として演奏して得てきた視点で、答えました。

—「オンライン配信によって音楽に触れることと、生演奏の違いをどう考えますか？」

柳生和太さん(チューバ)は「生の演奏会は、演奏者だけでなく、観客や、ホールそのものが一体となって作り上げるもの。同じ曲の中でも、1つとして

東日本大震災を仙台市で経験後、市民による対話の場を作る「てつがくカフェ@せんだい」の活動や、災害・ダイバーシティに関する取材活動を行う。

同じ音はないし、その日の客層や状態によって、曲の雰囲気が変わるのが特徴だと感じます。一方、オンライン配信によって、昔の名演奏をいつでもどこでも聴けることはやはり便利。役割が違うので、使い分けていくのが大切だと思います」と、生演奏とオンライン配信それぞれのメリットについて考えを述べました。

イタリア出身のオッタビアーノ・クリストーフォリさん(トランペット)は、「誰かに聴いてもらう」ことがモチベーションになるため、演奏会の中止が続く期間、自らの演奏の動画をインターネット上にアップしていました。しかし「生の演奏会の音の質には敵わない」と言います。「刺身とツナ缶は、いずれもマグロから作られた食べ物で、両方とも美味しいけれど、味も作り方も違いますよね」と使い分け方を喩えました。

—「音楽の力とは、なんだと思いますか？」

「今、音楽の優先順位は前より下がってしまった気がします。でも、私たちは東日本大震災の時に、音楽に励ましてもらったと感じます。音楽を通して地域の方々に何ができるのか、自分たちだけでは答えが出なくなってしまいました。」

これに対し、橋本さんは「“芸術が、人や時代を変える”のではなく、心の余裕を持てる、よい時代に、よい音楽が生まれてきたと思うのです。だから、よい社会を作るのも私たちの使命の一つでしょう」と言いました。

これに重ねて、岸良開城さん(トロンボーン)は「震災直後から、避難所などで演奏させてもらいましたが、正直、どんな気持ちで演奏すればいいかわかりませんでした。でも、演奏を聴いた人から『久しぶりにお腹の底から笑った』といった声をもらい、音楽の意味に気づくことができました」と、自らが「被災地に音楽を」の活動に参加して感じたことを語りました。

さらに、日本フィルから高校生へのメッセージとして、原川翔太郎さんは「音楽に限らず、少しでも興味を持ったことは遠慮せずにチャレンジしてほしい」と励ましました。また、この日参加した楽団員の中で最年長だった橋本さんは「音楽をできることはすてきな才能です。さまざまな形で、今後も皆さんが音楽を続けてくれたら嬉しいです」と言って、対話を結びました。

「きっと、全国の同世代も悩んでいる」

登壇した2～3年生に、事後インタビューをしたところ、今回の座談会を通して演奏に対する考えだけでなく、自らの生き方の価値観も変わったと言いました。「きっと、自分たちのように悩んでいる同世代は多いと思う。たとえば、全国のパートリーダーがオンラインツールで繋がり、語りあうような企画が今後できれば嬉しいです」と、次の目標をすでに思い描いていました。

実際に、部員たちは対談後、今まで交流がなかった関西の高校生とインターネットを通じて意見交換したりしているとのこと。彼らが主体的にアクションを起こすきっかけとなったのが、この日の対談であるなら、それは確実に、プラスの変化を起こしたのではないでしょう。

どう大切なのかを言葉にしづらいほど身近な存在で、多様な人をつなげる「媒体」になりうる文化や芸術だからこそ、今、その価値を見つめ直す時なのかもしれません。



1日だけの夏休みコンサート feat.東北の夢プロジェクト



2020年8月、岩手県と福島県にて、それぞれの地域で文化活動に励む子どもたちをゲストとして招き、オーケストラの舞台で披露する「東北の夢プロジェクト2020」を開催する予定でした。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、また共演団体の出演自体が難しくなったことから、2020年度の実施は見送ることとなりました。例年であれば、東北の方と直接顔を合わせ、交流することで関係を築きましたが、東京から東北への移動がはばかれるなか、現地の子どもたち、教育

関係者とオンラインで対話を重ねました。その中で見えてきたのは、中高生の吹奏楽部にとって大きな目標とする全日本吹奏楽コンクールの中止や、伝統芸能を披露する祭りの中止が相次いだことで、発表する機会がなくなってしまったことです。そこで、現地で吹奏楽の演奏や伝統芸能の踊りを撮影し、東京でのオーケストラ・コンサートの中で、各団体の演奏とインタビューを映像で紹介する「1日だけの夏休みコンサート feat.東北の夢プロジェクト」を開催いたしました。

映像には、岩手県から宮古高校吹奏



楽部(宮古市)、赤澤鎧剣舞(大船渡市)、福島県からは原町第一中学校吹奏楽部(南相馬市)の3団体が出演。ライブ配信をしたことによって、東北沿岸の子どもたちの文化活動をリアルタイムで全国に紹介できました。

加えて、映像ゲスト出演の2地域の市民文化会館で、ライブビューイングを開催。最初のご相談から本番までは2カ月弱と大変短い期間でしたが、公演趣旨に賛同くださり、インターネット環境等の準備を進めてくださいました。ご協力くださった会場の南相馬市のゆめはっと、宮古市民文化会館はともにコロナ禍以降、このライブビューイングが初めてホールにお客様をお迎えする事業となりました。

特別寄稿

カメラマン **井田 裕基**

私は昨年8月上旬に「東北の夢プロジェクト2020」で上映する映像を岩手県と福島県で撮影しました。

私が撮影したどの団体も、新型コロナウイルス感染症の影響で、大幅な練習時間の短縮に加え、発表の機会がほとんどないような状態でした。そして、今回の撮影が発表会を兼ねたものとなりました。もっと練習したい、もっとうまくなりたいというまっすぐな気持ちと、コロナ禍で練習できないと

いうもどかしさがあって、自分たちが今できることは何か考えざるを得ない状況だったのだと思います。現状を嘆くよりも、なりたい未来を自らが考え、積極的に関わり行動することでした。前に進めないことを肌で感じたのでしょう。驚いたのは、震災やコロナ禍で支えていただいた首都圏や県内外の方たちを今度は自分たちが支えたいと話してくれたことです。

過去の津波や飢饉の際にも郷土芸能が活発になったと聞きます。

コロナ禍という逆境だからこそ、様々な心の動きと向き合うようにな

り、自ら感情や新しい考えを育みません。世代や地域を越えた結びつきを強くし、他者を思いやる心を育てます。そして、私たちは、まったく新しい眼差しで未来へ目を向けることもできるのだと教えられました。



「被災地に音楽を」300回 オーケストラと高校生の対話イベント「今こそ音楽の話をしよう」

2021年1月6日、「被災地に音楽を」の300回目となるイベントを岩手県民会館にて行いました。参加した宮古高校吹奏楽部の皆さんとは、本来であれば2020年8月に共演する予定でしたが、コロナ禍により公演は中止。実際に会うことができない代わりに、オンライン会議ツールを用いた座談会の実施や、映像ゲストとして日本フィルの公演へ出演いただき交流を続けてきました。今回、日本フィルの楽団員はPCR検査を受けた上で盛岡へ訪問し、約1年半ぶりに再会を果たすことができました。

イベントには、7名の日本フィル楽員と宮古市出身のオーボエ奏者、大久保菜美さんが参加。宮古高校吹奏楽部からは17名の部員が参加しました。

第一部：音楽家と高校生の対話

コロナ禍により部活動が大きく制限されていた時期を経て、アンサンブルコンテストの出場といった通常の活動も出来るようになっていた1月初旬。「本番緊張しないためにはどうしたら良いか」「本番に向けてのメンタルをどうしたら良いか。本番前にどんなことを考えているの?」「音色のバリエーションを

増やす方法は?」といった演奏する上での心構えや技術的な質問が多く出されました。楽員からは、色をイメージしながら練習することや、部屋を真っ暗にして自分の音に集中できる状態にすることなど、プロならではのアドバイスがあり、部員たちはメモを取りながら熱心に耳を傾けていました。

最後に出された「高校生のうちにやっておいた方が良いことは?」という質問には、「吹奏楽だけではなく、興味のあること、やりたいことに迷わず挑戦してほしい。今しかできないことをやって視野を広げてほしい」「失敗しても良いからチャレンジしてほしい」とエールが送られました。

第二部：ミニコンサート

対話後、日本フィルから弦楽四重奏と木管三重奏による演奏が贈られました。弦楽四重奏の曲は、ウェーベルン作曲「弦楽のための緩徐楽章」。弦楽器4本だけで演奏されているとは思えない、重厚な音色がホールに広がりました。木管三重奏の演奏は、ホルンの信末碩才が今回のために編曲した「A Happy New "FROZEN"」。人気ディズニー映画『ア



ナと雪の女王』の楽曲と、お正月や冬にまつわる童謡を組み合わせたユニークな曲を披露しました。

参加者の感想

- ・周りのサポートもあったから音楽を続けて来られたという話もあり、私達も家族や地域の方々など多くの人が支えてくださっているの、感謝を伝えていきたいと思いました。
- ・印象に残ったのは、皆さんが色々な創作物に触れることが大切という話をしていたことです。曲の理解を深めたり表現を豊かにするために、たくさん知識を得たり幅広い感性を磨いていく必要があると思いました。
- ・音から別格すぎて、楽器ってこんな音ができるのだな、というのが素直な感想です。生で本物を聴く重要さを感じました。
- ・信末さんのミックスアレンジに鳥肌がたちました。私は作曲や編曲を習い事でやっていますが、このようなアレンジをやったことがなかったし、見たこともなかったの、大胆なアレンジの仕方に魅入られてしまいました。



大変な中で日本フィルを受け入れてくれた方々に感謝 被災地で演奏すると勇気や力をもらう

日本フィルハーモニー交響楽団
クラリネット奏者
伊藤 寛隆



被災地の現実を直視し、 演奏を届ける

2013年3月、宮城県南三陸町に行ったのが最初です。クラリネットは持ち運びができ、その音色は仮設住宅など様々な場所に適していると思い、3人で伺いました。初日は志津川中学校の体育館で子どもたちの前で演奏と指導を行い、2日目は仮設住宅に住む方の集会所に行きました。仮設住宅は限られたスペースに生活用品があって大変だと思いましたが、南三陸町の皆さんのほうが強かったです。たくましくなられている。もう前を向いていかないといけませんから、って。タクシーの運転手さんが「家族はまだ見つかっていないんです」と話してくれたのを聞き、絶句しました。演奏会場に行く前

に色々な場所を案内してもらい、考えさせられました。「演奏を聴いて少しでも豊かな気持ちになっていただけたら」と思いながら、演奏しました。

原町一中の伝統に感動

福島県南相馬市の原町第一中学校は、もともと吹奏楽で有名でしたから、繋がりできて訪問できること自体に興味がありました。実際に行ってみると、震災という経験をして先生も子どもたちもその家族も、いろんな状況にあったにもかかわらず、あれだけしっかり活動し、伝統を守っているということに感動しました。彼らの演奏から僕らが元気をもらいました。みんなで何かを達成することの素晴らしさや、楽器をやることの楽しさを共有したような気持ちでした。その時、「自分が演奏できるとい

うことは、必ず一緒に演奏してくれる人がいるということだから、周りの人に対する感謝や尊敬の念を持つことが大切だ」という話をさせて頂きました。

被災地の 人々の思いに感謝

生の演奏が一番強いメッセージになると信じていますが、実際は被災地で演奏してくると、逆にこちらが勇気や力をもらいます。音楽を求められるなら、いくらでも演奏しに行きたい想いですが、決してこちらから勇気を与えに行こうとは僕は思えませんでした。被災地では自分たちの無力さを切に感じるからです。日本フィルの活動が続いたのは、現地の方々が、大変なことがある中で、自分たちの生活以上に自分たちの町を明るくしていくためには、

こういう活動が必要だと思って、受け入れてくれたからです。本当に感謝の気持ちしかありません。これからも、東北地方でもっと多くの演奏会をやりたいと思います。被災地だからと特別扱いをしないで、普通に交流し、コンサートを色々な場所でできたら、みなさんにもっと近い存在になれるのではないかと思います。



音楽の無力さを感じ、音楽に出来ることを探りに 被災地のことを広く伝え、受け取ったものへの恩返しをしたい

日本フィルハーモニー交響楽団 常務理事

後藤 朋俊



感度がないと、被災地での演奏会は成り立たないと感じます。この活動を長く続けてこられたのも、被災地の方に支えられたからだと思っています。我々がやってきたことよりも、受け取ってきたものの方が大きいのです。活動を通じて、今の被災地で起きていることを広く伝えていくこと。それが避難所等で演奏させていただいたことへの恩返しに繋がるのではないかと考えています。

東北の変化に合わせて 何を築くかを考えたい

10年が経とうとしますが、関わってきた子どもたちが、音楽を通して次に繋がっていく可能性は純粋に素晴らしいことだと思います。南相馬の原町第一中のように、世代が変わっても我々の関係性が続いてこられたのは、震災を機に一緒に作り上げてきたものがあるからだと思っています。今度は彼らが色々な所で活躍して、自分なりに発展させていくことでしょう。社会に彼らが出ていった時にそれぞれの場所でコミュニティを作っていくことが、我々が将来に向けていいものを支えていくということだと思います。東北の方も10年経って生活も変わっていくので、我々もそれに合わせて、彼らと一緒に音楽を通して築いていくものを考えたいと思います。そうして生まれた音楽というのは本当に力があると思いますし、社会に届くメッセージだと思います。10年間続けてきた日本フィルにしかできないことであり、役割であり責任だと思うのです。

演奏することの怖さ

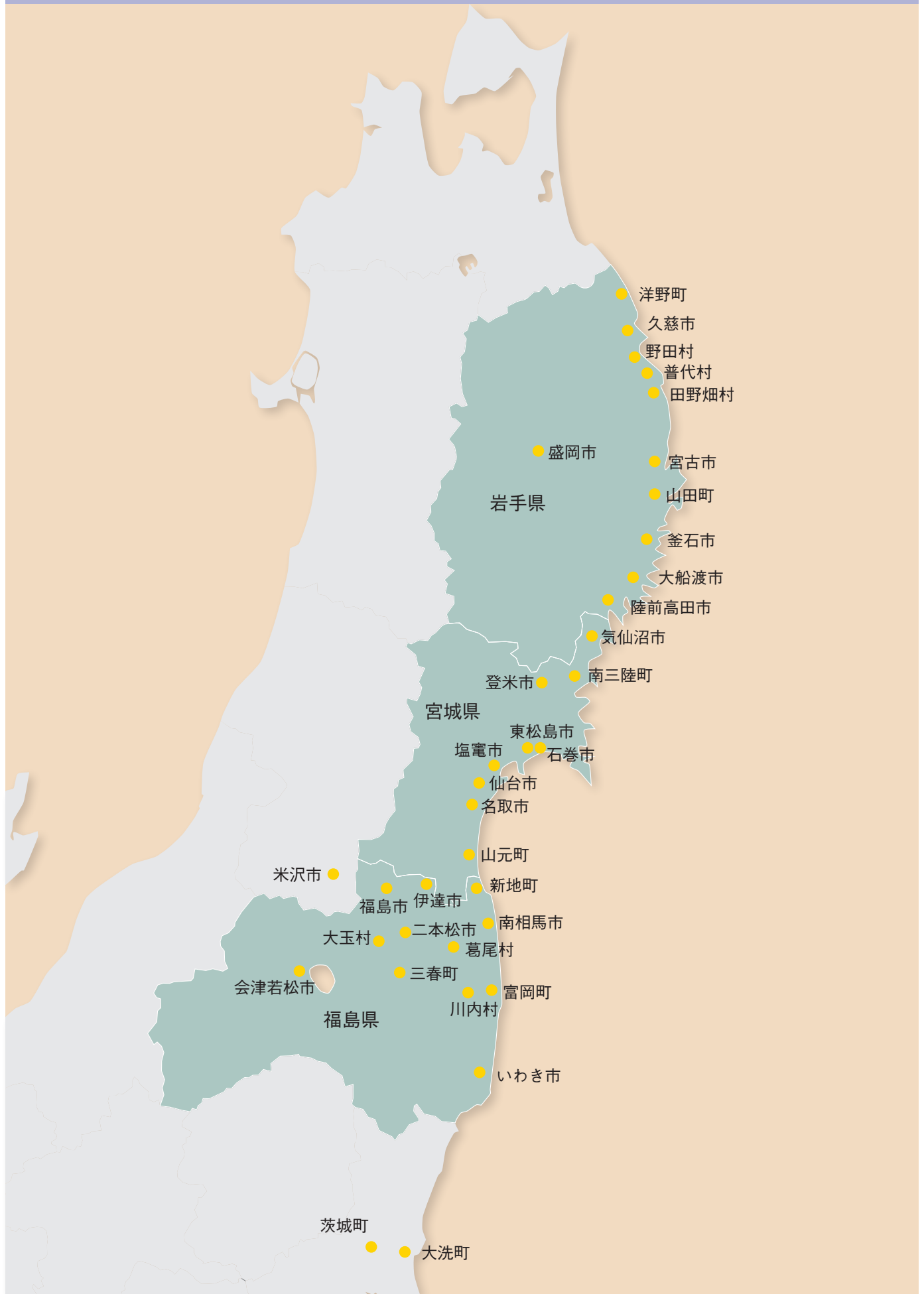
初めて訪問したのは2011年4月6日、福島県の二本松市です。現地に行く途中の道が信じられない状態だったことをよく覚えています。二本松に着いて浪江町の町長とお会いし、これからどうしていくか分からないことを伺いました。先の見通しがまったく分からなかった時ですから、今置かれている状況に必死だったことと思います。一カ月経っても、東京からでは被災地の様子は具体的には分からないという状況でした。

あれほど演奏するのが怖い気持ちになったのは初めてでした。よく晴れた青空とは反対に、こんな時に音楽をして本当によいのだろうかと思いましたが、音を出すこと自体が罪に感じられるほど、避難所はあまりにも静かだったのです。演奏後に80歳ほどのおじいさんが、音楽を聴いてこんなに涙したことはない、こんな想いは生まれて初めてだと声をかけてくださいました。この

方はどういう心境で音楽を聴いてくださったのかと、音楽が無かった方がかえってよかったのだろうか、などと考えたりもして複雑な心境になりました。音楽の無力さを感じましたね。それから、ただ演奏するだけでなく、二本松で感じたような怖くて重苦しい空気をどれだけ自分の中で昇華し、どうやって音楽に変えていくかということを考えるようになりました。無力さも感じるからこそ、音楽にできることを探せるのではないかと思います。一方で、何か社会に訴えようとする時には音楽はとても力を持つので、社会的な活動をする時こそ、その力を間違えないようにしないといけないと思います。

演奏よりも、心の交流

また、感受性の強い子どもたちに、気持ち不安定な状況のなかで音楽を聴いてもらうことが本当によいのかと思いつつ弾いたこともありましたが、親を亡くしている子どももいますから。演奏よりも、心の交流をすること。そういう



「被災地に音楽を」実施一覧（2011年4月6日～2021年1月6日）

回数	開催日	会場			内容		
1	2011年	4月6日	福島県 二本松市	東和文化センター	Vn,Va,Tb		
2		5月4日	福島県 会津若松市	会津若松市文化センター	弦楽四重奏		
3		5月6日	埼玉県 加須市	騎西小学校（避難所）（福島県双葉町児童含む）	弦楽四重奏		
4		5月8日	宮城県 名取市	増田西小学校（避難所）	Vn,Key		
5				閉上地区日和山			
6				名取市文化会館（避難所）			
7				5月9日		気仙沼市	階上中学校（避難所）
8							松岩公民館（避難所）
9							面瀬中学校（避難所）
10				5月10日		石巻市	石巻高校（避難所）
11		湊小学校（避難所）					
12		門脇中学校（避難所）					
13		石巻中学校（避難所）					
14		北上子育てセンター					
15	5月12日	埼玉県 加須市	騎西中学校（福島県双葉町生徒を含む）	金管五重奏			
16	6月4日	岩手県 花巻市	山の神温泉「幸迎館」（避難所）	Vn,Vc			
17			釜石市		甲子中学校（避難所）		
18			6月6日		大船渡市	大船渡市民文化会館リアスホール（避難所）	
19	6月5日	福島県 田村郡三春町	田園生活館（避難所）	弦楽四重奏			
20			町営体育館（避難所）				
21	6月6日		三春小学校				
22	6月25日	福島県 南相馬市	鹿島保険センター（避難所）	弦楽四重奏			
23			6月26日		原町第二中学校（避難所）		
24			道の駅南相馬（避難所）				
25			原町第一小学校（避難所）				
26	6月25日	福島県 二本松市	JICA研修センター	Cl,Ob,Fg			
27			あだたら体育館（避難所）				
28	6月26日	安達郡大玉村	フォレストパークあだたら				
29	7月10日	宮城県 本吉郡 南三陸町	志津川高校	〈クリニックと合同演奏〉 金管五重奏、木管五重奏 〈クリニックと合同演奏〉			
30			ホテル観洋（避難所）				
31	7月11日		志津川中学校				
32	8月6日	宮城県 気仙沼市	日本バプテスト教会	弦楽四重奏			
33			小泉中学校（避難所）				
34			階上小学校（避難所）				
35	10月4日	宮城県 東松島市 石巻市	鳴瀬第一中学校	弦楽四重奏			
36			北上中学校				
37			石巻専修大学				
38	10月5日		あとりえDaDa				
39			追分温泉旅館（避難所）				
40	10月6日	仙台市	泉白陵会（介護施設）				
41			10月7日		愛泉会（障害者施設）		
42	10月20日	福島県 いわき市	江名中学校	弦楽四重奏 〈クリニック〉Tb 弦楽四重奏			
43			江名中学校				
44			下神白第一集会所				
45			10月21日		内郷第二中学校		
46	10月26日	茨城県 東茨城郡大洗町	南中学校	弦楽四重奏			
47			第一中学校				
48	11月21日	岩手県 陸前高田市	第一中学校	弦楽四重奏			
49			11月22日		花巻市	山の神温泉「幸迎館」	
50	11月24日	福島県 福島市	みず和の郷（介護施設）	弦楽四重奏			
51			飯野学習センター				
52			11月25日		松陵中学校		
53			南体育館（研修室）				
54	2012年	1月20日	岩手県 久慈市	山村文化交流センター	弦楽五重奏		
55				岩手県立久慈病院			
56				久慈市文化会館 アンバーホール			
57		1月22日		久慈市文化会館 アンバーホール	〈小中学生対象コンサート〉〈動物の謝肉祭〉 〈親子対象コンサート〉〈動物の謝肉祭〉		
58		3月27日	福島県 南相馬市	原町第一中学校	〈クリニックと合同演奏〉 Cl,Fl,Tp,Hr,Tb,B,Tb		
59				3月28日		伊達市	桃陵中学校
60				3月29日		南相馬市	鹿島中学校
61				3月30日			原町第二中学校
62		3月28日	福島県 田村郡三春町	三春小学校	〈ワークショップ〉マイケル・スペンサー, Vn,Va,Vc,Tb		
63		3月28日	埼玉県 加須市	騎西コミュニティセンター	弦楽四重奏		

回数	開催日	会場			内容	
64	5月20日	宮城県	本吉郡南三陸町	志津川中学校	弦楽四重奏	
65				ホテル観洋ロビー		
66				さんさん商店街		
67	5月21日			南方仮設住宅集会所		
68	6月17日	山形県	米沢市	八幡原体育館	木管五重奏	
69				市体育館ほか		
70	8月7日	宮城県	石巻市	北上中学校	弦楽四重奏	
71				北上中学校		
72	8月8日			あとリエDaDa	〈岡崎市立城北中学校と共演〉	
73	8月9日			こ〜ぶのお家 いしのまき		
74	8月26日	宮城県	本吉郡南三陸町	さんさカフェ出版会	Tb,Tub	
75	9月19日	福島県	福島市	平野中学校	弦楽四重奏	
76				福島市商工会 (福島市音楽堂)		
77				松川工業団地 (第一仮設住宅集会所)		
78	9月20日			松川工業団地 (第二仮設住宅集会所)		
79	9月21日			飯野中学校		
80	9月30日	東京都	江東区	カトリック潮見教会	金管五重奏	
81	10月24日	福島県	南相馬市	鹿島小学校	弦楽四重奏	
82				農家民宿いちばん星		
83	10月25日			南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	弦楽合奏	
84	10月26日		いわき市	同上ウェルカムコンサート	弦楽四重奏	
85				三春小学校		
86	10月27日		いわき市	江名中学校	弦楽四重奏,Tb	
87				江名中学校		
88				内郷第二中学校	弦楽四重奏	
89	12月14日	茨城県	東茨城郡茨城町	明光中学校	金管五重奏	
90	12月15日	福島県	いわき市	梅香中学校	〈クリニック〉Tp,Tb,Hr,Tub,Eup,Ci,Fl,Perc	
91				双葉高校、双葉翔陽高校、富岡高校サテライト校		
92				小名浜市民会館	〈合同演奏あり〉金管五重奏	
93	2013年 3月3日	宮城県	石巻市	石巻市役所市民サロン	弦楽四重奏	
94				3月4日		
95				女川野球場仮設住宅		
96	3月5日			みなと荘		
97	3月21日	宮城県	本吉郡南三陸町	志津川中学校	Ci三重奏	
98				志津川中学校		
99	3月22日			南方仮設住宅集会所	〈クリニック〉Ci	
100	4月3日	福島県	南相馬市	原町第二中学校	〈クリニックと合同演奏〉	
101				4月4日		鹿島中学校
102				4月5日		石神中学校
103				4月6日		原町第一中学校
104	5月27日	岩手県	下閉伊郡田野畑村	田野畑中学校	弦楽四重奏	
105				田野畑アズビィホール		
106	5月28日		下閉伊郡普代村	普代村うねとり荘		
107				普代中学校		
108	5月29日		九戸郡野田村	野田小学校		
109	6月16日	岩手県	大船渡市	宮田応急仮設住宅	弦楽四重奏	
110				6月17日		気仙光陵支援学校
111				上平応急仮設住宅		
112	6月18日			御喜来小学校		
113	6月23日	宮城県	石巻市	石巻市総合体育館	管弦楽合奏	
114	10月22日	福島県	南相馬市	原町第一中学校	Tb四重奏	
115				10月23日		高平小学校
116	10月24日			原町第三小学校・金房小学校・福浦小学校・		
117				鳩原小学校		
118	10月25日			原町第二小学校		
119	11月15日	岩手県	陸前高田市	朝日のあたる家	金管五重奏	
120				11月16日		高田第一中学校・高田東中学校
121	11月17日			陸前高田高校	〈クリニック〉	
122	11月29日	岩手県	久慈市	宇部小学校	金管五重奏	
123				久慈中学校		
124	11月30日			長内中学校・夏井中学校	〈クリニック〉Fl,Ci,Tp,Hr,Tb,Tu,Perc	
125				久慈市文化会館 アンバーホール		
126	12月1日		九戸郡洋野町	種市中学校・大野中学校	金管五重奏	
				種市中学校	〈クリニック〉Fl,Ci,Tp,Hr,Tb,Tub,Perc	
					金管五重奏	

回数	開催日		会場		内容	
127	2013年	12月9日	東京都	江東区	カトリック潮見教会	弦楽四重奏
128	2014年	1月14日	福島県	田村郡三春町	三春交流館「まほら」	弦楽四重奏
129		4月3日	福島県	南相馬市	原町第三中学校	〈クリニック〉 Fl,Cl,Tp,Hr,Tb,Eup,Perc
130		4月4日			石神中学校	〈クリニック〉
131		4月5日			原町第一中学校	〈クリニック〉
132		4月28日	宮城県	登米市	南方第2仮設住宅集会所	弦楽四重奏
133		4月29日		石巻市	女川町野球場仮設住宅	〈楽器体験〉
134					こ〜ぷのお家 いしのまき	
135		4月30日		気仙沼市	NPOオレンジネットワーク	
136		6月17日	岩手県	大船渡市	第一中学校	〈クリニック〉 Fl,Cl,Tp,Hr,Tb,Tub,Perc
137		6月18日			大船渡東高校	〈クリニックと合同演奏〉 金管五重奏
138		6月19日			さんりくの園	
139					大船渡市民文化会館リアスホール	
140		6月20日			宮田仮設住宅集会所	
141					大船渡高校	〈クリニックと合同演奏〉
142		7月6日	宮城県	本吉郡南三陸町	志津川高校	〈クリニックと合同演奏〉 Tb,Per
143		7月7日			志津川高校	〈クリニックと合同演奏〉 Tub
144		7月14日	岩手県	釜石市	唐丹中学校	弦楽四重奏
145					小佐野公民館	
146		7月15日			旧釜石商業高校体育館	
147				釜石教会		
148	7月16日			鶯住居小学校・東中学校		
149				栗林小学校		
150	11月2日	宮城県	名取市	名取市文化会館	弦楽四重奏	
151	11月3日	福島県	福島市	福島テルサ	《動物の謝肉祭》	
152	11月4日	宮城県	東松島市	東松島コミュニティセンター	《動物の謝肉祭》	
153	11月8日	東京都	杉並区	荻窪音楽祭〈みらい夢コンサート〉	吹奏楽合奏	
154	11月28日	岩手県	宮古市	第一中学校	管楽合奏	
155	11月29日			港南中学校		
156				千徳小学校		
157	11月30日			宮古小学校	〈クリニック〉	
158				宮古小学校		
159	12月1日			田老町サポートセンター		
160	12月9日	岩手県	釜石市	東中学校	弦楽四重奏	
161	12月10日			祥雲支援学校		
162	12月15日	福島県	伊達市	保原小学校	弦楽四重奏	
163				保原町商工会		
164	12月20日	東京都	江東区	カトリック潮見教会	弦楽四重奏	
165	12月23日	福島県	南相馬市	南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	弦楽四重奏	
166	2015年	5月1日	福島県	南相馬市	原町第二小学校	金管五重奏
167					原町第二小学校	〈クリニック〉 Hr,Tb,Tub
168		5月2日			原町第一中学校	〈クリニック〉 Cb,Fl,Ob,Cl,Fg,Sax,Tp, Hr,Tb,Tub,Eup,Perc
169		5月3日			原町第一中学校	〈クリニックと演奏〉 木管五重奏
170		5月29日	岩手県	下閉伊郡山田町	岩手県立山田高校	弦楽四重奏
171		5月30日			山田町立北小学校	
172					介護事業所「恵みの里眺望」	
173		5月31日			いきがいデイサロン	〈Vn体験あり〉
174					いっばいっば岩手	
175		6月19日	岩手県	宮古市	高浜小学校	弦楽四重奏
176					宮古恵風支援学校	
177		6月20日			山口公民館	〈クリニック〉 Vn,Va,Vc
178					かがやきデイサロン	
179	9月4日	福島県	南相馬市	同慶寺	金管五重奏	
180	9月5日			原町第一中学校、原町高校	〈クリニック〉	
181	9月6日			南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	〈ゲスト出演〉	
182	11月8日	東京都	杉並区	荻窪音楽祭 〈みらい夢コンサート〉	吹奏楽合奏	
183	11月28日	岩手県	大船渡市	大船渡市民文化会館リアスホール	《動物の謝肉祭》	
184	11月30日	福島県	南相馬市	鹿島生涯学習センター	《動物の謝肉祭》	
185	12月19日	東京都	江東区	カトリック潮見教会	金管五重奏	
186	2016年	4月2日	福島県	南相馬市	同慶寺	弦楽四重奏
187		4月3日			原町第一中学校	〈レクチャーとコンサート〉 弦楽四重奏,Cl
188		5月6日	福島県	南相馬市	原町第一中学校	〈ワークショップ〉 マイケル・スペンサー, Vn,Va,Vc,Tb
189				原町第一中学校	〈ワークショップ〉	

回数	開催日		会場		内容		
190	2016年	6月16日	岩手県	久慈市	久慈市文化会館 アンバーホール	<クリニック>金管五重奏	
191		6月17日					久慈市文化会館 アンバーホール
192		6月18日					久慈高校
193				もぐらんぴあ			
194		8月26日	宮城県	山元町	花笠区交流センター 山下中学校 子どもセンター 増田児童センター		金管五重奏 <クリニック> 管楽合奏
195		8月27日					
196		8月28日					
197				名取市			
198		10月31日	宮城県	本吉郡南三陸町	南三陸病院 特別養護老人ホーム 慈恵園 雄勝オーリングハウス 川の上・百俵館 こ〜ぶのお家 いしのまき		弦楽四重奏
199	11月1日	石巻市					
200							
201							
202	11月2日						
203	11月13日	東京都	杉並区	荻窪音楽祭 〈みらい夢コンサート〉	吹奏楽合奏		
204	2017年	12月11日	岩手県	下閉伊郡山田町	山田町中央コミュニティセンター いっばいっば岩手 宮古市民文化会館 田老地区サポートセンター 宮古恵風支援学校 宮古市総合福祉センター	弦楽四重奏,Ob <クリニック>	
205		12月12日					宮古市
206							
207		12月13日					
208							
209							
210		3月24日	福島県	二本松市	光雲閣 二本松市民会館 二本松市民会館 光雲閣 龍泉寺 安達文化ホール	金管五重奏 <クリニック> Tp,Tb,Hr,Tub,Fl,Ci 金管五重奏,Fl,Ci,Pf Fl,Ci,Pf 金管五重奏 金管五重奏,Fl,Ci,Pf	
211		3月25日					
212							
213	3月26日						
214							
215							
216	7月1日	福島県	南相馬市	原町第一中学校 原町高校	管楽合奏		
217	7月2日						
218	8月10日	宮城県	気仙沼市	向洋高校 愛耕幼稚園 リアス・アーク美術館	弦楽四重奏		
219	8月11日						
220							
221	10月14日	福島県	南相馬市	南相馬市博物館 南相馬市博物館	<ワークショップ>マイケル・スペンサー,Vn,Va,Vc,Ci,Tb <ワークショップ>マイケル・スペンサー,Vn,Va,Vc,Ci,Tb		
222	10月15日						
223	11月12日	東京都	杉並区	荻窪音楽祭 〈みらい夢コンサート〉	吹奏楽合奏		
224	11月28日	福島県	田村郡三春町	恵下越復興住宅 集会所 三春交流館「まほら」 葛尾村役場	弦楽四重奏 《動物の謝肉祭》 弦楽四重奏		
225	11月29日						
226	11月30日						
227	11月30日	宮城県	石巻市	鮎川小学校	<ワークショップ>マイケル・スペンサー,Vn,Va,Vc,Tb		
228	12月11日	岩手県	宮古市	宮古市総合福祉センター 崎山貝塚縄文の森ミュージアム・宮古高校 宮古市民文化会館 宮古市民文化会館 鎌ヶ崎公民館	弦楽四重奏 <クリニック> Fl,Ci,Tb <参加型コンサート>《動物の謝肉祭》 《動物の謝肉祭》 弦楽四重奏		
229	12月12日						
230							
231							
232							
233	2018年	5月23日	宮城県	石巻市	川の上・百俵館 雄勝ローズファクトリーガーデン あとりえDaDa こ〜ぶのお家 いしのまき	〈朗読と共演〉弦楽四重奏,Ci 弦楽四重奏,Ci 〈ダンスと共演〉	
234		5月24日					
235		5月25日					
236		8月8日	宮城県	名取市	第二中学校	<クリニック> Tb,Ci 【ソフトバンク東北絆CUP】	
237		8月9日					
238		8月10日	岩手県	大船渡市	大船渡市民文化会館リアスホール 大船渡市民文化会館リアスホール 大船渡市民文化会館リアスホール	<クリニック> Fl,Ci,Per <ワークショップ>マイケル・スペンサー, 弦楽四重奏,Cb,Fl,Ci,Per,Pf 〈地元伝統芸能と共演あり〉弦楽四重奏,Cb,Fl,Ci,Per,Pf 《死の舞踏》	
239							
240							
241		8月24日	宮城県	塩竈市	第一中学校 第一中学校	<クリニック> Tp,Ci 【ソフトバンク東北絆CUP】 <クリニック> Tp,Ci 【ソフトバンク東北絆CUP】	
242		8月25日					
243	9月1日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tb,Ci 【ソフトバンク東北絆CUP】		
244	9月9日	岩手県	陸前高田市	陸前高田第一中学校	<クリニック> Tp,Ci 【ソフトバンク東北絆CUP】		
245	9月15日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tp,Ci 【ソフトバンク東北絆CUP】		
246	9月28日	岩手県	宮古市	宮古市民文化会館 崎山貝塚縄文の森ミュージアム 崎山貝塚縄文の森ミュージアム	<クリニック> Vn,Va,Vc <ワークショップ> マイケル・スペンサー,弦楽四重奏,Pf Vn,Va,Vc,Fl,Ci,Per,Pf 《死の舞踏》		
247						9月29日	
248							
249	10月2日	福島県	双葉郡富岡町	富岡町文化交流センター 学びの森	弦楽四重奏		
250	10月3日					田村郡三春町	御木沢小学校
251	10月3日					双葉郡葛尾村	葛尾小中学校

回数	開催日	会場		内容	
252	2018年 10月4日	福島県	田村郡三春町	三春交流館「まほら」	弦楽四重奏
253	10月6日	福島県	南相馬市	原町第一中学校	〈クリニック〉 Vn,Cb,Cl,Fg,Tp,Tb,Perc
254	10月7日			南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	〈合同練習〉
255	10月8日			南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	〈合同演奏あり〉「兵士の物語」 (単独演奏),吹奏楽合奏
256	10月7日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tp,Cl 【ソフトバンク東北絆CUP】
257	10月8日	福島県	新地町	尚英中学校	〈クリニック〉 Tp,Cl 【ソフトバンク東北絆CUP】
258	10月14日	宮城県	石巻市	湊中学校	〈クリニック〉 Tp,Cl 【ソフトバンク東北絆CUP】
259	10月20日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tp,Cl 【ソフトバンク東北絆CUP】
260	11月11日	東京都	杉並区	荻窪音楽祭 〈みらい夢コンサート〉	吹奏楽合奏
261	11月24日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tp,Cl,Tb 【ソフトバンク東北絆CUP】
262	11月27日	宮城県	山元町	宮城病院	金管五重奏
263	11月28日			山元町防災拠点センター つばめの杜ひだまりホール	
264	2019年 5月28日	宮城県	石巻市	二子団地西町会館	弦楽四重奏
265				二子団地西町会館	
266	5月29日			雄勝小中学校	
267	5月30日			こ〜ぷのお家 いしのまき	
268	6月29日	岩手県	盛岡市	IBC岩手放送	弦楽四重奏
269	6月30日		大船渡市	大船渡市防災観光交流センター	〈ヴァイオリン体験とミニコンサート〉
270				大船渡市防災観光交流センター	〈ヴァイオリン体験とミニコンサート〉
271	7月1日		盛岡市	岩手銀行赤レンガ館	
272	8月6日	宮城県	仙台市	生出中学校	〈クリニック〉 Tp,Sax 【ソフトバンク東北絆CUP】
273	8月7日	岩手県	大船渡市	大船渡中学校	〈クリニック〉 Tp,Sax 【ソフトバンク東北絆CUP】
274	8月10日	岩手県	宮古市	宮古市民文化会館	〈クリニック〉 Fl,Ob,Cl,Hr,Tp,Tb,Perc
275	8月11日		盛岡市	岩手県民会館	オーケストラ
276	8月17日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tp 【ソフトバンク東北絆CUP】
277	8月24日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tb 【ソフトバンク東北絆CUP】
278	9月16日	福島県	いわき市	好間中学校	〈クリニック〉 Cl 【ソフトバンク東北絆CUP】
279	9月28日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Cl 【ソフトバンク東北絆CUP】
280	10月2日	福島県	双葉郡葛尾村	葛尾小中学校	弦楽四重奏,Cl
281	10月3日		双葉郡富岡町	富岡小中学校	
282	10月4日		田村郡三春町	三春交流館「まほら」	
283	10月4日	福島県	南相馬市	原町第一中学校	〈クリニック〉 Fl,Ob,Cl,Fg,Hr,Tp,Perc
284	10月5日			南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	〈合同練習〉
285	10月6日			南相馬市民文化会館「ゆめはっと」	〈合同演奏あり〉木管五重奏(単独演奏), 吹奏楽合奏
286	10月5日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tp 【ソフトバンク東北絆CUP】
287	10月20日	宮城県	名取市	みどり台中学校	〈クリニック〉 Tb 【ソフトバンク東北絆CUP】
288	11月5日	福島県	川内村	かわうち保育園	ピアノ四重奏
289	11月5日			川内村コミュニティセンター	〈JAL×日本フィルワークショップ〉 弦楽四重奏,Pf
290	11月10日	東京都	杉並区	荻窪音楽祭 〈みらい夢コンサート〉	吹奏楽合奏
291	11月25日	宮城県	亶理郡山元町	山元町防災拠点センター つばめの杜ひだまりホール	Vn,Cemb,Sop
292	11月26日			宮城病院	
293	11月30日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台	〈共演〉 Tb 【ソフトバンク東北絆CUP】
294	2020年 6月7日	岩手県	宮古市	宮古市民文化会館	オンライン座談会
295	8月23日	東京都	千代田区	東京国際フォーラム 〈一日だけの夏休みコンサート〉	オーケストラ(赤澤鑑剣舞・宮古高校吹奏楽部・原町第一中学校が映像出演)
296		岩手県	宮古市	宮古市民文化会館 〈一日だけの夏休みコンサート〉	ライブビューイング
297		福島県	南相馬市	南相馬市民文化会館「ゆめはっと」 〈一日だけの夏休みコンサート〉	ライブビューイング
298	10月1日	福島県	双葉郡富岡町	富岡町文化交流センター 学びの森	弦楽四重奏
299	10月2日		田村郡三春町	三春交流館「まほら」	
300	2021年 1月6日	岩手県	盛岡市	岩手県民会館	〈高校生との対話イベントと演奏〉 Vn,Va,Vc,Ob,Fg,Hr

《楽器名略語表》

Vn:ヴァイオリン
Va:ヴィオラ
Vc:チェロ
Cb:コントラバス
Fl:フルート
Ob:オーボエ

Cl:クラリネット
Fg:ファゴット
Sax:サクソフーン
Hr:ホルン
Tb:トロンボーン
B.Tb:バストロンボーン

Tub:チューバ
Eup:ユーフォニアム
Perc:打楽器
Pf:ピアノ
Cemb:チェンバロ
Sop:ソプラノ



あとかき

東日本大震災という未曾有の災害による爪痕は私たちの想像を絶し、被災地で目にするのはあまりにも過酷な現実でした。私たちは自分たちのあまりの無力さに落胆し、嘆きながらも、音楽が傷ついた人々の心の整理や、離れてしまった人と人を結び付けるために、僅かながらその後押しになることを知ることができました。

被災地の人々に少しでも寄り添いたいと思い、変化する現地の状況を意識して活動を続けてきましたが、各地の抱える課題はまだまだ残っています。そして震災から10年が経った今、これからは未来を担う子どもたちの夢と笑顔を、地域の方々と一緒に育んでいきたいと考えています。

「被災地に音楽を」の活動は、私たちに多くの素晴らしい出会いとつながり、そして多種多様で実り多き経験を与えてくれました。この活動にご支援・ご協力いただいている方々に心より感謝いたします。これからも私たちは、社会に果たすべき役割を自らに問いかけながら、活動を続けてまいります。どうか日本フィルの活動にご理解をいただき、さまざまな形でご参加、ご協力を頂ければ幸いです。

「被災地に音楽を」

ご寄付・ご支援者一覧

三菱UFJニコス株式会社

株式会社三菱UFJ銀行

杉並区ふるさと納税

リコー社会貢献クラブFreeWill

その他、多くの皆様からご寄付をいただきました。

令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業

「被災地に音楽を」被災地に心を寄せた10年300回の記録

発行日	2021年3月1日
企画・制作	公益財団法人日本フィルハーモニー交響財団 〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1 電話 03-5378-6311 https://japanphil.or.jp/
発行元	公益財団法人日本フィルハーモニー交響財団／文化庁
デザイン	株式会社タクトデザイン事務所
写真	山口敦、平館平、田頭真理子、井田裕基、多比良秀俊、ヤマザキミノリ、日本フィル職員
協力	河村光伸、横前誠、三浦秀之、船場ひさお、佐藤允治、平山徹、八木まどか、井田裕基、落合千華



雄勝ローズファクトリーガーデン

雄勝ローズファクトリーガーデンは、2011年3月11日の巨大津波で壊滅した石巻市雄勝町を復興するために、“花と緑の力で”を合言葉に被災地の方々が立ち上げた復興プロジェクト「雄勝花物語」の活動拠点です。被災した方々が亡くなった人とつながる慰霊の場として、また被災者と支援者が交流する癒しの場としてガーデンを運営するとともに、震災の教訓を伝える防災教育・語り部、写真掲示などの震災伝承活動も行われています。2017年に復興のための工事の影響で移転し、現在の姿になりました。日本フィルは雄勝をたびたび訪れて演奏活動を行っており、2018年5月にはローズファクトリーガーデンで演奏会を行いました。